
青い鴉 - 二十と一の短編 -

稲葉ほうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い鴉 - 二十と一の短編 -

【Nコード】

N6444G

【作者名】

稲葉ほつき

【あらすじ】

“夜の闇をよぎる怪鳥の影のように・・・”。読む人々の心の中に、束の間の幻影を投げかける。そんな作品を作り上げる事が叶うならば、これ程喜ばしい事はないと思います。死んだ父の遺品であるダツフルコートを巡る怪異「父の思い出」、綱渡りの名人を仰ぎ見る人々の話「ある日の出来事」、浮浪者が巻き込まれたゲームにまつわる顛末「椅子取りゲーム」を含む二十と一話の短編に、蛇足ながら「まえがき」と「あとがき」を添えて皆様にお届けいたします。私が気分の儘に書き上げた作品ばかりですが、時間の許す限り

お付き合いですね。光栄です。

夜の闇をよぎる怪鳥の影のように・・・

『青い鴉』のまえがきに代えて

柴 由良

日本にも大勢、短編の名手と呼ばれる作家がいますが、私個人としてはこれまで、外国人作家の手による短編集をより好んで読む傾向がありました。日本とは異なる風土に根ざしたそれらの物語の多くは、怪奇と幻想、恐怖と残酷、謎や意外性・・・そういった要素によって構成され、それらが作品の中に余すことなく盛り込まれております。そして、それらを読み始めた瞬間、何事にも囚われる事なくなつた私の想像力は、普段過ごしている日常の規律からも解放されると、偉大なる作家達が生み出した空想の世界を探検し始めるのです。

しかし、外国人作家の作品を実際に原文で読める読者というのは大勢いるわけではなく、かくいう私もその一人なのですが、その多くは様々な翻訳者の方の手を通じて紹介されています。ところが、多くの読者がその恩恵に預かっているにも拘らず、作品によっては“本来の世界観を損なっている”という事で著しく評価を落とされているものが存在しているのは、非常に残念な話ではありますが、見逃す事の出来ない事実でもあります。

小説というのが作者自身の手によって、単に言葉のみで紡ぎあげられた世界観によるものである以上、原文至上主義を掲げるのは至って自然な行為だと思えます。しかしその一方で、私としてはこの“日本語に翻訳しなければならぬ”という一手間が、時として良質な作品を自動的に判別してくれるフィルターの役割を果たしているとも思えるのです。一時的な流行を追っただけの“売れる作品”というのに、私は全く興味がありません。

もちろん、作家というのが職業の一つの形態である事を考えると、本来はお金を稼ぐのが目的であり、その行為を非難する事は間違っ

ていると言えるでしょう。また、そういった中にも真に興味深い良質な作品として後世に受け継がれていくものが数多く含まれているのも事実です。反対に、幾ら素晴らしいと呼べる作品でも、誰も手に取らないままに埃を被っているような状態であれば、この世から消えてしまっただけですし、いつの間にか忘れ去られてしまう事でしょう。

さてここに、我が友人であり変人でもある“稲葉ほうき”という作家が拵えた二十と一の短編を掲載します。これらの作品の全ては彼の頭の中をよぎった幻想の残滓のようなものであり、この世に生み出される無数の作品と同じく、時を経ずしてこの世から消えてしまっ運命にあるものばかりです。

それでもなお、これらの作品が少しでも多くの方々の目に触れるよう、今回このような場にて公開する事を説得し、了解を取る事が出来ました。我が友人の生み出した空想の世界に少しばかり足を踏み入れて頂き、しばしの間この奇妙なる世界をお楽しみ下さいませよう、皆様をお願いいたします。また、万が一にも興味を持っていただけの方がおられましたら、一言声を掛けてやってくだされば、本人も大変喜ぶと思います。

それではまた、何処かでお会い出来るその日まで……。

父の思い出

父は漁師だった。それも、腕が良いことで街でも評判の漁師だった。私がまだベッドの中で夢の海原を漂っている頃、父は本物の海へと船を漕ぎ出して、私たち家族の為に必死で魚を獲っていた。そして、私が眠い目をこすりながら朝の食卓に着く頃には、朝食を食べ終えたらしい父は、コーヒーを飲みながら朝刊に目を通しているのだった。

普段から物静かで口数も少なかった父は、長年の強い潮風と直射日光に晒された人だった。真っ黒に日焼けした肌と、それとは対照的に薄い金色がかかった髪の毛は、光の加減で白く光って見えた。節くれだった頑丈な手で網を操り、どんな風雨でも耐えられる広い大きな背中をしていた。

小さい頃の私には、そんな父が恐ろしくもあつた。そのため、うつかり眼を合わせてしまう事が無いよう、玄関に掛けられたダツフルコートの方ばかりを眺めて食事を摂っていた。それは、父が漁に出掛ける時に着ていくコートであり、毎朝決まった場所に掛けられていた。そんな父の抜け殻からは決まって水滴が滴り落ち、玄関のコンクリートの床を黒く染めているのだった。

そんな風にして、私は毎朝の慎ましい食事時間を何とかやり過ごしていた。もつとも、私がそんな注意を払わなくても、父が自ら話しかけてくる事は一度も無かった。

そんな私たちの暮らしを変える出来事が、ある日起きた。隣の国が戦争を始めたのだ。私の国でも戦争に向けて国中の若い男はみんな兵士として徴収されていった。私の父も他の多くの男達と共に戦争に駆り出されていった。街に残されたのは私のような子供や女、それに老人くらいのものであった。

出征の当日、街の港には普段見慣れた漁船ではなく、兵士を運ぶ

ための黒塗りの大きな軍艦が停泊していた。その舷側に立っている父に向かって、私と母は必死になって手を振っていた。しかし、父がそれに気がついた様子はなかった。

戦争が始まった当初、街には連日の戦勝報告が届けられ、その勢いは留まるどころを知らなかった。大人も子供も一緒になってその事を話題にしたし、自分達の夫や父を誇らしく思っていた。しかし、戦争は一向に終結する目途を見せず、激化の一途を辿っていくばかりだった。やがて、どちらの国も疲弊しきり、誰もが何の為に戦っているのか分からなくなってきた頃、隣の国の王の死をきっかけにして戦争は突如終結を迎えた。戦争が終わり、この街を出て行った男たちが戻ってきたが、その中に父の姿は無かった。

国から支給される恩給により、私たち家族は父が亡くなった後も何とかそれまで通りに生活する事が可能だった。しかし、玄関に掛けられたダツフルコートからは再び雫が滴り落ちる事は無くなり、その代わりに父を思つてすすり泣く母の声とその瞳から滴り落ちる雫がテーブルに黒い染みを残すようになっていった。

母の悲しみは、時間と共に薄れていくどころか、ますます悪化を辿っていたようだった。私が寝静まった真夜中に、家の中を歩き回る音が聞こえるようになってきたのもこの頃からだった。その度に私は、いつも決まった夢を見るようになった。

それは、朝靄が立ち込める水上に浮かぶ一艘の小船の夢だった。その船には一人の男が乗っており、遙かなる水面に向かって投網を打っていた。男は厚手のダツフルコートを着込み、それが早朝の刺すような冷気からしつかりと男を守ってくれていた。やがて、水面から立ち上る白い煙によって男の姿は掻き消されてしまうのだが、無限に続けられる男の投網を打つ動作だけが、白いスクリーンに映し出されたシルエットのようにボンヤリと私の記憶に残っているのだった。

ある日、いつものように目覚めた私が朝の食卓に着くと、テーブルの上には三人分の食事が用意してあった。私が母にその事を尋ねると、これは父の食事であると、さも当たり前のように答えるのだった。私が母に向かつて、父はもうこの家には帰って来ることはない事を告げると、母は玄関の方を指差して、久しぶりの大漁だったので、朝食も摂らずに街にある酒場に祝杯を挙げて出掛けたのだと答えた。母はそんな父に対して愚痴を言っているようであったが、ひどく満足そうな顔をしていた。

私が母の指差すほうを見ると、そこには見慣れた父のダッフルコートが掛けられていたのだが、その下のコンクリートは何故か黒く濡れていた。私は席を立ち、父のダッフルコートに触れてみたが、それは少しだけ湿り気を帯びていた。

その後も母は、父がこの家に帰ってきたことを信じて疑わず、三人分の食事を作り続けた。それと共に、真夜中に家の中を歩き回る音が度々聞こえてくるようになり、私は決まってあの夢を見た。そして、その夢を見た翌朝には必ず、父のダッフルコートは少しだけ湿り気を帯びていた。

私はそれを母の所為だと考えていた。母が父のダッフルコートを着込んで、夜中に街を彷徨っているのではないかとさえ疑うようになっていた。父を亡くした深い悲しみから、母は夢遊病者となってしまうたのだろう。自分では無意識のうちに……。

母の身を案じた私は、一つの計画を思いついた。母が夜中に出歩かないよう、寝室に鍵を取り付けることにしたのだ。母には、最近は何物騒だから母の安全の為に取り付けるのだと説明した。そうした私の言い訳を、母は意外にもすんなり聞き入れてくれたのだった。

しかし、そうした私の努力も空しく、翌朝になるとダッフルコートは湿り気を帯びていた。母の寝室の鍵は外側からしっかりかけられており、私が開けてやるまでは一步も部屋からは出られなかった。だからと言って、私までが母の言い分を信じて父が生き返ったなど

と考えることは無かった。現実的に考えて、私たち家族の悲しみを知りながら、こんな性質の悪い悪戯を仕掛けてきている犯人がどこかに存在するはずだった。何としてもそいつを捕まえてやるうと思つた私は、その晩は一睡もせずに関人がやってくるのを待ち構えていた。しかし、悪魔の如き英知を備えた犯人は、そんな私の計画にいち早く気が付いたのか、その晩は現れることは無かった。それから続けて三日三晩、寝ずの番を敢行したが、私のその努力は報われることはなく、残されたのは言い知れぬ苦痛と疲労だけだった。

そんな私の元に、ある日珍しい友人が訪ねてきた。この男は街でも有名な変わり者だったが、若くして莫大な遺産を相続した幸運の持ち主だった。普段は広大な屋敷に籠もって何やら難しそうな研究に励んでいるのだったが、こうして時々ふらりと街にやって来るのだった。

そこで私は、ここ数日のこの奇妙な出来事を彼に話して聞かせた。彼は話を聞き終わると私に向かつて、君がいつまでも父親の死を受け入れないせいで、君の父親は成仏できないのだと脅かすのだった。彼がそんなに信心深い男だと思わなかつた私は、君までそんな幽霊だの亡霊だのを信じているのかと笑うと、彼は自信ありげに、幽霊は存在する。今晚その証拠を私に見せてくれると言うのだった。

翌朝、私が目覚めて最初に見たものは、ダツフルコートが掛けている場所に残された足跡だった。それはまっすぐ私の部屋へと続いていた。真夜中にダツフルコートを着て歩き回っていたのは、私の母でも外部からの侵入者でもなく、私自身だったのだ。

台所のテーブルに腰を下ろしてコーヒーを飲んでいる友人が私に話して聞かせてくれたところによると、彼は母から手紙を貰つて家に来て来たのだった。母は私が真夜中に起きだして、父のダツフルコートを着て出掛ける姿を何度も目撃していたらしい。父を亡くした悲しみ故の行動と思つた母は、私を刺激しないようにその事を黙っていたばかりか、自らもそういう振りをする事で僅かながら悲

しみを紛らわす事が出来たようだった。しかし、私が母の部屋に鍵を取り付けてしまったため私の行動を監視することが出来なくなり、私のみを案じて友人に事情を説明したのだそうだ。

その日以来、真夜中の物音は聞こえなくなり、あの夢を見ることはなくなった。今では私も父と同じく漁師をやっている。まだ父の名声には遠く及ばないが、いつの日か父を超える日が来ることを願って、今朝もあのダツフルコートを着込んで朝靄の立ち込める小船の中で投網を打つのだった。

罪な二人

「フルハウス！」

そう言うのと、男が得意げに手札を広げた。既に勝利は自分の物だと確信した様子で葉巻に火を点ける。

「え〜っと、今回のかけ金は幾らだったかな。」

その言葉に、周りを取り囲んだ野次馬からは嫉妬とも羨望ともつかぬ溜息がこぼれる。

「勝負は終わってみたいと分からない。そうだろ？こちはらロイヤルストレートフラッシュだ。」

ディーラーが得意げに手札を広げた。野次馬は一変して、今度は驚きの叫びをあげるのだった。

「今日の俺は絶好調のようだ。折角掴んだチャンスだったのに、残念だったな。」

テーブルを叩きながら席を立った男は、ディーラーを指差しながら罵った。

「イカサマだ！そんな役が出来るはずがない。みんなもそう思うだろ！」

周りの群集に同意を求める男だったが、所詮は他人事。誰もが今後の成り行きを見守ろうと、にやにや笑っているだけだった。

ディーラーに慌てた様子は見られなかった。その落ち着き払った様子からは、余程見破られない自信があるのだろう。

「イカサマ呼ばわりされるからには、何か証拠でもあるのでしょうか？そうでなければ、軽々しくそんな言葉を口にしないほうが良いですよ。さもないと・・・。」

その言葉が終わらないうちに、男を取り囲むように黒ずくめの男が二人姿を現した。

「・・・どうも今夜はツキに見放されたようだ。ほらよ！」

男は財布から札を取り出すとテーブルの上に放り投げ、その場を

後にした。

ディーラーはその夜、見事なイカサマにより男から大金を巻き上げる事に成功した。しかし、そのお金が全て精巧に出来た贋金だと気付いた時には、男は既に何処かへと姿を晦ましていたのだった。

ハードボイルド

遙か遠くからでも、その長方形の入れ物の中身が一杯だつて事は分かりきつていた。光を透過させるスケルトンボディのその箱が、俺の目の前で静止すると　俺が入り易いようにという配慮か何かは知らないが、そんな気を遣ってもらう程老いぢやあいないつもりだが　招き入れるように、扉が大きく開け放たれた。それと時を同じくして、最前から中に陣取っていた奴らが、俺に向かつて“乗るなら早く乗ってくれ”と言わんばかりの迷惑そうな顔付きでこちらを見てくる。中には、“あんたの乗る場所なんて、果たしてあるのかしら？”と言わんばかりの様子でこちらに挑みかけてくる奴もいた。朝っぱらからそんな蔑視に晒される破目になるなんて、今日はまったくついていない。まあどうせ、再びこいつらと顔を合わせることはないのだから、どう思われようが構わないのだが、これからしばらく、こんな奴らと同じ時間、同じ空間を共有しなければならぬかと思うと、まったく癪にさわるといふものだ。それと引き換えに俺が得られるものと言えば、この清々しい空気との別れだけだ。まったく割に合わない。出発までにはもうそれ程時間は残されていないが、この気分を紛らわしてくれような物が急に欲しくなった。こうなると、今更ながら昨晚飲み残したスコッチの事が悔やまれて仕方がない。しかし、そんな俺の思いなど知らぬ誰かの手が、背後から俺を箱の中へと押し込んだ。まったく無粋な事をする奴もいるものだ。感傷に浸る時間すら与えてくれないとは。

突き飛ばされるようにして中へと滑り込んだ俺は、他の乗客たちの迷惑そうな視線に晒されながらも、何とか自分の場所を確保することに成功した。俺は“満員”という言葉に軽々しく騙されてしまふような、普通の奴らとは違う。大抵の奴らはその言葉に踊らされて、もうすっかり自分の入り込める隙間など残っていないと自分勝

手に思い込むようだが、そんな時でも必ず誰かが余分なスペースを確保していたりするものだ。それを知っている俺は、今回もまんまとその残されたスペースに滑り込んだ訳だ。それにしても、こっちにその気が無くてもすぐ隣にいる奴の硫黄臭いニオイを嗅がされる破目になるのには辟易させられる。ほら見る、向ここのレディーの肌艶なんか、すっかり褐色がかつた色になっちまっているじゃないか。えっ？最近はそのというのが流行だと？そうなのか。俺の若い時にはそんな奴見かけなかったもんだが・・・まあ、いいさ。時代は変わるのだろうし、俺も年を取ったという事だろうな。

そうこうしている内に、今まで俺の体に伝えられていた規則正しい振動が、何の前触れも無く突如として止んだ。おかしい。目的地に到着するにはまだ早すぎる。本能的に自分の身に襲いかかる危機を感じた俺は、すぐに次の行動へと移れるように神経を研ぎ澄ませると、相手の出方を静かに待ち構えた。しかし、相手の方が一枚上手だったらしい。卑怯にも背後から強烈な一撃を俺に喰らわせると抵抗する間もないうちに自由を奪われてしまった。薄れいく意識の中で、誰かが無遠慮にも俺の衣服を漁っていくのだった。

意識が戻った時、俺は熱々の目玉焼きになっていた。ハードボイルドに徹しきれなかった俺に相応しい最後だ。

マシユマロ

わたしはネコを飼っています。

真っ白でフワフワなので“マシユマロ”と名付けました。

ある晴れた日曜日。わたしは飼っているネコにマシユマロをあげました。

ネコはすごく嬉しそうな顔で、“美味しい、美味しい”と言ってくれました。

わたしも何だか嬉しくなって、もっとマシユマロをあげました。

ネコは咽喉をならして、“美味しい、美味しい”と言ってくれました。

“もっと欲しい、もっと食べたい”とねだるので、仕方なくわたしの分もあげました。

お腹がいっぱいになったネコは、すやすやと眠りに付きました。

わたしは、マシユマロを電子レンジに放り込みました。

それは、どンドン、どンドン膨らんでいきます。

でも、加熱し過ぎてネットネットのかたまりになってしまったので、ゴミバケツに捨てました。

飼っていたネコがいなくなったので、わたしはイヌを飼い始めました。

茶色で胴長だったので、やっぱり“マシユマロ”と名付けました。

ある曇った月曜日。わたしは飼っているイヌにマシユマロをあげました。

イヌはすごく迷惑そうな顔で、“甘い、甘い”と言いました。

わたしは何だかガツカリして、今度はソーセージをあげました。

イヌはしっぽを振って、“美味しい、美味しい”と言ってくれました。

“もつと欲しい、もつと食べたい”とねだるので、仕方なくわたしの分もあげました。
お腹がいっぱいになったイヌは、すやすやと眠りに付きました。台所にはパンとトマトケチャップとマスタードがあります。私の期待は、どンドン、どンドン膨らんでいきます。あと足りないのは、ソーセージだけです。

飼っていたイヌがいなくなったので、わたしはニワトリを飼い始めました。

真っ赤なトサカだったので、やっぱり“マシユマロ”と名付けました。

ある風の強い火曜日。わたしは飼っているニワトリにソーセージをあげました。

ニワトリはすごく怒った顔で、“辛い、辛い”と言いました。

わたしは何だかイライラして、今度はスクランブルエッグをあげました。

ニワトリは高く鳴くと、“美味しい、美味しい”と言ってくれました。

“もつと欲しい、もつと食べたい”とねだるので、仕方なくわたしの分もあげました。

お腹がいっぱいになったニワトリは、すやすやと眠りに付きました。次の日の朝、目覚まし時計がひどく喧しく鳴り響きました。

わたしの耳元で、リンリン、リンリン鳴り続けています。

仕方なく、私は時計を掴んで壁に向かって投げつけました。

飼っていたニワトリがいなくなったので、わたしは子ブタを飼い始めました。

可愛らしいピンク色でしたが、やっぱり“マシユマロ”と名付けました。

ある大雨の水曜日。わたしは飼っている子ブタにスクランブルエッ

グをあげました。

子ブタはすごく泣きそうな顔で、“しょっぱい、しょっぱい”と言いました。

わたしは何だか悲しくなつて、今度はスパゲッティをあげました。子ブタは鼻を鳴らしながら、“美味しい、美味しい”と言ってくれました。

“もっと欲しい、もっと食べたい”とねだるので、仕方なくわたしの分もあげました。

お腹がいっぱいになった子ブタは、すやすやと眠りに付きました。日が暮れる頃になると、網戸の隙間から蚊が入ってきました。

わたしの周りを、ブンブン、ブンブン飛んでいます。

私は蚊取り線香に火をつけると、蚊遣り豚の口の中に、そっと忍ばせることにしました。

飼っていた子ブタがいなくなったので、わたしはカバを飼い始めました。

灰色でゴツゴツでしたが、やっぱり“マシユマロ”と名付けました。ある落雷の木曜日。わたしは飼っているカバにスパゲッティをあげました。

カバはしかめた顔で、“すっぱい、すっぱい”と言いました。

わたしは何だか可笑しくなつて、今度はカボチャをあげました。

カバは大きな口を開けながら、“美味しい、美味しい”と言ってくれました。

“もっと欲しい、もっと食べたい”とねだるので、仕方なくわたしの分もあげました。

お腹がいっぱいになったカバは、すやすやと眠りに付きました。ハロウインの日に、わたしの家で仮装パーティーを開きました。

たくさんのお客さんが、ジャンジャン、ジャンジャンやって来ます。その中に泥棒が紛れ込んでいたようで、私の大切なカバンが盗まれてしまいました。

飼っていたカバがいなくなったので、わたしはキリンを飼い始めました。

黄色に茶色の水玉模様でしたが、やっぱり“マシユマロ”と名付けました。

ある大嵐の金曜日。わたしは飼っているキリンにカボチャをあげました。

キリンは退屈そうな顔で、“苦い、苦い”と言いました。

わたしは何だかつまらなくなつて、今度はビールをあげました。

キリンは長い首を伸ばしながら、“美味しい、美味しい”と言ってくれました。

“もっと欲しい、もっと飲みたい”とねだるので、仕方なくわたしの分もあげました。

お腹がいっぱいになったキリンは、酔つて眠りに付きました。

屋根の上のアンテナに、洗濯物が引つ掛かったみたいです。

映りが悪くなったテレビを、バンバン、バンバン叩いてみます。

梯子に登つて屋根に上がる途中、酔つ払つて真つ逆さまに落ちてしまいました。

足を骨折してしまつたわたしは、病院のベッドの上です。

ある何でもない土曜日。わたしは病院を退院しました。

わたしが家へと帰る途中、道端で一匹のネコと出会いました。

飼っていたキリンがいなくなったので、わたしはネコを飼うことにしました。

真つ白でフワフワなので“マシユマロ”と名付けました。

ある日の出来事

ある日、私が街を歩いていた時の出来事である。通りに立っている人たちがみんな、男性も女性も、年寄りも若者も、大人も子供も、一斉に空を見上げていた。私もそれにつられるようにして空を見上げたのだが、私に見えたのは青空に浮かんでいる白い雲だけだった。何がどうなっているのか今ひとつ理解できなかった私は、すぐ近くにいた人にその疑問をぶつけてみる事にしたのだった。

「すみません。何を見ているのでしょうか。」

「さあ、私にも良く分かりませんが、何か始まるんじゃないでしょうか。」

「見えませんか？ほら、あそこにロープが張ってあるでしょう？あれを使うようです。」

別の見物客にそう教えられてよくよく目を凝らしてみると、道路を挟んで向かい合う高層ビルとビルの間には、確かに一本のロープが張られているのだった。そのまましばらく馬鹿みたいに空を見上げていると、今度はタキシード姿に身をつつんだ一人の紳士が現れた屋上に現れた。白い手袋をはめた彼の手には、細長い棒のようなものが握られており、真下から見上げている我々に向かって、丁寧にお辞儀をするのだった。

「まさか、こんな所で“つなわたり”を始める気じゃないだろうな。正気の沙汰とは思えない。」

誰に向かって言うでもなく、気付けば私はそんな事を口にしていた。私の見る限り、紳士の体には命綱はつけられていなかった。ロープの真下にも安全ネットは無かった。それにも関わらず、紳士は両手で棒を持ち直すと、綱の上に一步踏み出した。

「こんな所から真つ逆さまに落ちたら、ひとたまりもないだろうな。……。」

独り言のようにそう呟く私の前で、恋人同士らしい二人組みの会

話が聞こえてきた。

「あの人、あんな事をして平気なのかしら？」

「馬鹿だな。ヘリコプターで吊り上げているに決まっているだろ？ここからだと遠くで見えないだけさ。」

「何だ、つまんないの。」

銀縁の眼鏡をかけた男は、片手をポケットに突っ込み、もう片方の腕には買物袋いっぱいのおレンジを抱えていた。一方の女は、ブランド物のバックを片手に、男の腕に自らの腕を絡ませた姿勢で立っていた。

男が言うように、紳士の上空にはヘリコプターが1台浮かんでおり、動きに合わせて微妙に移動しているようにも思えた。しかし、ヘリコプターはしばらくの間宙に浮かんでいたのだが、次第に何処かに飛んで行き、見えなくなってしまった。それにも関わらず、右へ左へとバランスを取りながら歩いていく紳士の足取りは止むことはなかった。むしろ、一つ間違えれば落ちてしまいそうな、危なっかしげな足取りにしか見えなかった。

「ヘリコプターで吊り上げているなんて、嘘じゃない。」

「馬鹿だな。ロープの下に透明な強化ガラスがあつて、それがビルの上に掛け渡されているのさ。ここからだと遠くで見えないだけさ。」

「何だ、つまんないの。」

先ほどから側でゴチャゴチャ言うこの二人組みを、私は非常に疎ましく思い始めていた。命綱があるうがなかるうが、紳士の身が危険な事には変わりはないし、見ているこちらは手に汗握るスリルを味わいたいただけなのだ。そんな時に水を差すような事を言うなんて、興奮めもいいところだ。

そう考えていたのは私だけではなかったようである。あれ程晴れ渡っていたはずの青空が、にわか曇り始め、パラパラと小雨が降り出した。幸いにしてこの雨は一瞬にしてやんだのだが、そのおかげで強化ガラスなど無いことは一目瞭然となった。この結末に、私

は非常に胸のすく思いがした。

「強化ガラスが設置してあるなんて、嘘じゃない。」

「馬鹿だな。あの紳士の腰にピアノ線が括りつけてあって、ロープと平行になるように張られているのさ。あれだけ高い場所だろ？この場所から見たってロープと重なって見えなくなる仕掛けさ。」

「何だ、つまんないの。」

この頃には既に、私は紳士が命綱などつけていない事を完全に確信していた。何とかしてこの紳士の名誉を証明せねばならないという使命感さえ覚えるようになっていた。それなのに、男は相変わらずそれを認めようとしないし、女に至っては愚痴をこぼしてばかりだ。退屈しているのならばさっさと何処かへ行ってくれればいいものを、実際には興味津々で見入っている。その証拠に、買物袋の中からオレンジが1個転がり落ちた事に、二人はまったく気がついていないのだ。

そんな時、空に一つの赤い風船が舞い上がった。それは高層ビルの屋上付近まで浮かび上がったかと思うと、突如大きな音を立てて破裂した。その音に驚いた紳士は思わず足を滑らせてしまったようだ。私が確信していたとおり命綱をつけていなかった紳士は、我々が見守る中で真つ逆さまに地面へと落下して行った。

通りは一時、人々の悲鳴と絶叫で埋め尽くされた。その叫び声に混じって、先ほど私に赤い風船を奪われた女の子の泣いている声も聞こえてきた。しかし、誰もその事に注意を払う者はいなかった。私は、剥きたてのオレンジを頬張ると、口中に広がる瑞々しい果汁を味わいながらその場を後にした。ポケットの中には、その役目を終えたオレンジの皮が入っていた。

聖なる少年

私が駆け出しの新聞記者だった頃　　と言っても、当時の私は会社の雑用ばかり命じられていたので、取材はおるか記事を書く機会さえなかったのですが　　いつものように古い新聞記事を整理していました。その中に、ひと際私の興味をそそる記事が載っており、熱心にその記事を読み始めたのです。それはある地方紙に掲載された小さな記事だったのですが、“聖なる少年”と標題をつけられた一人の男の子についての記事でした。

少年の名前はトマス。5歳の時に生死の境をさまよう程の重大事故に遭遇した彼は、幸運にも一命を取り留める事に成功したのです。そして、病室のベッドの上で両親にこう告げたのです。「パパ、ママ。僕は天啓を受けました。これからは正直に生きていきます。」その言葉通り、トマス少年は正直な子供として街でも評判になったのです。記事はそれを伝える内容でした。

その新聞記事が書かれてから既に15年の月日が経っていました。その後の彼が、一体どんな人生を送ったのかという事に興味を持つた私は、休みの日を利用して彼が住んでいた街に出掛けてみる事にしました。この取材結果を元に記事を書き、編集長にも私が一人前の記者として十分やっていけるだけの能力を持っている事を認めてもらおうと考えたのです。

探し求めていた彼の家に辿り着いた時、私の期待は最高潮に達しており、はやる気持ちを抑えながら玄関の呼び鈴を鳴らしたのでした。家の扉を開けてくれたのは、上品な雰囲気の中年の女性でした。“聖なる少年”の母親として私が想像していたのに相応しい女性です。

「初めまして。突然お邪魔して申し訳ありません。トマスさんはおられますか？」

「トマス？この家にはそんな名前の者はおりませんよ。家をお間違えじゃないですか？」

突然の訪問者である私の事を警戒しながらも、女性は丁寧な答えでくれた。

「そうですね。15年前には確かにこの家に住んでいたハズなのです。“聖なる少年”と地元紙でも評判になっていた男の子なのですが、何かご存知ありませんか？」

私の質問が女性にもたらした衝撃はすさまじいものだった。先ほどまでの上品な物腰が一変したかと思うと、あからさまに不快な表情を浮かべてこう言い放った。

「そんな子供は知りません。他に用事が無いのであればこれで失礼します。」

私の何が彼女の機嫌を損ねたのか皆目見当がつかないまま、私の目の前で扉は勢いよく閉められたばかりか、ご丁寧にも鍵を掛ける音まで聞こえてきたのだった。

途方に暮れた私は仕方なく、通りがかりの街の人に彼の消息を尋ねてみることにしました。

「すみません、トマスという名の男性を探しているのです。ご存知ですか？」

「トマス？一体、誰の事だ？」

「15年前に、“聖なる少年”と称えられた男の子の事です。」

すると、尋ねられた街の人は先ほどの女性同様、見るからに不快な表情を浮かべる、こう言うのでした。

「あのならず者が。あいつなら、ほら、あそこに見える建物の中だ！それじゃあな。」

そう言うのと、私を残して何処かへと行ってしまいました。

街の人が指差した先には、コンクリートで出来た四角い箱型の建物がありました。そこで、私とその建物に行ってみると、街の人が教えてくれたとおり確かにトマス青年（彼は20歳になっていましたから、少年ではないのです）と出会う事が出来たのでした。

「初めまして。私は駆け出しの新聞記者なのですが、“聖なる少年”と称えられた君のその後を取材しに来たのです。是非、協力してもらえないでしょうか。」

私の願いを快く承諾してくれたトマス青年は、次のような話を聞かせてくれました。

世の中には、時として嘘をついた方が上手くいく場合があるのは知っているよね。だけど僕は“嘘をつかない”って神様と約束したのさ。そのおかげで僕は生き返る事が出来たし、それくらいの代償は仕方がないと今でも思っている。僕は本当に“正直なヤツ”だったんだ。みんなが僕の事を疎ましく思うくらいにね。だってそうだと？ 思った事には正直に答えるし、内緒話も秘密にしておけないヤツなんだぜ。そんなヤツと友達になりたいなんて思うかい？ でも、そんな事は僕にとって見ればどうでも良かったんだ。最悪なのは、僕が7歳の時に起きたある出来事なんだ。

その日、僕はパパがママと違う女の人と歩いているのを見たんだ。ママにはその事を内緒にしていたんだけど、僕の様子がおかしい事に気がついたママが、僕に尋ねたんだ。

「トマス、何かママに隠していることがあるでしょ？ ママに話してくれる？」

その時のママは、僕が何かイタズラでもして、それを隠しているんだろうくらいに考えていたと思うよ。でも、そうじゃなかったんだ。それが悲劇の始まりさ。

「はい、ママ。パパがママと違う女の人と歩いているのを見ました。」

ママの顔色が一瞬、真っ青になったかと思うと、今度は徐々に赤くなってきた。ママはさっきよりも優しい口調で僕に尋ねてきたよ。その表情は強張っていたけどね。

「トマス、その女の人はどんな人だった？正直に答えてね。」

「綺麗で若い女の人だったよ。」

「そう。それで、ママとその女の人と、どっちが綺麗だと思う？」

僕は答えに困ってしまった。子供っていうのは案外、親の表情を注意深く観察しているものさ。幾ら言葉は優しくても、明らかにママの様子がおかしいのに気付かない訳がない。怒っているのなら尚更さ。僕は危険を感じて、黙っている事にしたんだ。でも、ママは僕の事を許してくれるつもりはなかった。僕の肩を掴むと、揺さぶるようにして僕に尋ねた。

「トマス！ちゃんと答えなさい。さもないと、今晚の夕食は抜きよ！」

“夕食抜き”だなんて、当時の僕にとってこれ程ひどい仕打ちはないと思うよ。それに、これ以上黙ったままでママの機嫌を損ねたくなかったから、僕は仕方なくこう答えたのさ。

「ママは世界一綺麗だよ。だけど、その女の人ママに負けないくらい綺麗だったよ。」

ママが寝室でパパを殺すのを見たのは、その晩の事だった。僕に見られたのを知ったママは、僕に襲い掛かってきた。僕は怖くなって必死に抵抗したんだ。気がついた時には、ママは動かなくなっていたよ。まるで誕生日に買ってもらった人形みたいだね。

しばらくして、警察がやってきて僕に色々と質問して行った。

僕はそれに正直に答えたよ。パパを殺したのがママだって事。ママはいつの間にか動かなくなっていたって事。

両親を失った僕はその後、孤児院に預けられたんだ。あそこは、今思い出してもひどい場所だったよ。13歳の誕生日を迎えた時、僕は孤児院を脱走した。ここでもやっぱり、周りの連中は大人も子供もみんな僕の事を疎ましく思っていたからね、脱走はとても簡単だったよ。きっと、誰も僕を捜そうなんて真似はしなかったんじゃないかな。

もちろん、そのままだと食べていけないから、僕は街角で泥棒の真似事をして暮らすようになった。そうそう、ここで断っておくけど、僕は確かに正直者だけど、だからってモラルが高い訳じゃない。僕は聖人君子じゃないからね、単に嘘をつかない正直者だけだから、そこは勘違いしないでくれよ。

そして18歳になった時、僕はある窃盗団に入団したんだ。目的の為に手段を選ばないようなグループだったからね、必要であれば殺人も厭わなかったよ。ところが、仲間の一人がドジを踏んだせいで僕まで警察に捕まってしまった。その後の展開は説明するまでもないと思うけど、僕は警察に聞かれるままに洗いざらい全てを話したよ。窃盗団に関するありとあらゆる事をね。おかげで窃盗団は壊滅。おまけに僕は刑務所暮らしで、こうやって死刑が宣告されるのを待っているって訳さ。

まあ、僕の今までの人生なんて、こんなところかな。ところで、ちよつと良い機会だからこれだけは絶対に覚えておいて欲しいんだけど、近いうちに僕はこの世から消えてなくなるんだ。それは死刑が宣告されるって意味じゃなくて、文字通り消えてなくなるのさ。理屈は僕にもよく分からないけど、5歳の時に僕を助けてくれた神様が、最近再び僕の前に現れてそう言ったんだ。まあ、こうして考えてみると、彼は神様じゃなくて悪魔だったのかもしれないけど、そんな事はもうどうでもイイよ。

トマスとの会話はここまでで時間切れとなつてしまった。私は彼に、後日再び面会に来る事を約束したが、彼は乾いた笑いを上げると、多分それは無理だろうと答えるのだった。

その翌日、私の耳にも刑務所から一人の犯罪者が忽然と姿を消したというニュースが届いた。男が入れられていた独房は完全なる密室で、消える直前まで誰かと話をしている声を聞いたと看守も証言

していた。ちなみにその男こそ、かつては“聖なる少年”と称えられたトマスその人である事は、今更申し添えるまでもないだろう。

夜明け前

私の人生を果物の成長と重ね合わせて考えてみるならば、彼女と出会った頃の私はきつと、十分に熟しきれていない、半熟な存在だったに違いない。彼女と過ごした、たった数時間の出来事は、私の成長に決定的な影響を与えてくれた。私はそれを今でも大切に思っている。

波の音に誘われるようにして立ち寄った浜辺で、遠く水平線を見つめている彼女の姿を偶然見かけたのが、私たち二人の出会いだった。

その日は珍しく随分と暖かい日で、私がそうやって浜辺まで足を運んだのも、波の音に誘われたというよりは、その陽気に誘われたのだろう。浜辺に打ち寄せる波の音は、明瞭な音を響かせていた筈なのに、私はその音を必死で聞くまいと、無意識に耳を塞いでいた。私はその時、何かしら言い知れぬ本能的な恐怖 それは自己の喪失のような恐怖 を感じて、そんな行動を取ったのだが、そんな私の行動とは関係なく、次第にその波が起こす振動が私の体内を巡る血液と共鳴を始めると、それに呼応するように私の深部で何かが疼き始めた。私の脳裏では、その衝動を打ち消すように喧しく警鐘が鳴り響いていたのだが、私はそれを何かの始まりを告げる合図であると錯覚していた。

最初に、私は彼女との出会いを“偶然”と呼んだけれど、もしかしたらそこには、私の知らない、何かしらの必然性が備わっていたのかもしれない。けれど、その時の私は、そんな事すら考えつきもしないくらいに子供だったのだ。

私はすぐにその場を離れる事も出来ず、自分の身に突如沸き起こったこの不可解な出来事を楽しむかのように、彼女の隣に腰を下ろ

すと黙つて前を向いていた。春の海は陽気な陽射しに照らされて、まるで磨き上げられた鏡のように真つ平らな水面を映し出していた。しかし、それは長くは続かず、どこからか吹き始めた風によって少しだけ膨らみ始めた水面は、初めはそれと気付かないほど微かに、しかし次第に大きなうねりを形成していき、それはいつしか、見事な曲面を形作るまでになっていた。その全てが、私を飲み込んでしまおうとするかのように、勢いよく浜辺に向かって押し寄せて来るのだったが、私の足元で砕けて白い泡となって消えていった。

気がつくと、太陽が水平線の彼方へ沈み始める時刻になっていた。彼女は急に立ち上がり、姿を変えていく海を惜しむかのように、無遠慮に足を突っ込んで徒に掻き回し始めた。あれほど真つ青だった海の色は、今では混じり気の無い血の色のように赤く染まっていた。その鮮やかな真紅でさえ、時間が経過する共に、醜く黒く固まっていくのだろう。

「夜の海って、黒くて粘りつくような感じで、まるでタールみたいじゃない？その中に入ったらきつと、体に纏わりついて離れないような気がするの。冷たくて、暗くて、苦しくて。」

私に声を掛けられたのを驚く風でもない様子の彼女は、私に背を向けたままこう言った。

「そうね。まるで意思を持っているかのように、あなたの髪に触れて、首筋をなぞり、腕や足に絡みついて、胸を優しく包んでくれるわ。最後に、あなたの奥深くへと入り込んで、この世の全てを忘れさせてくれるのではないかしら。」

「一体、どんな気持ちができるのかしら。ねえ、試してみない？」

どうしてそんな言葉を口にしたのか、自分でも信じられなかった。私は立ち上がると、彼女の方へと一歩近づこうとした。しかし彼女は振り返ると、私に向かってこう答えた。

「あなたはまだ、その時じゃないわ。そこから先には進むにはまだ、若すぎるもの。」

東の空から太陽が顔を出し始めていた。私が“タールみたい”と表現していた夜の海は姿を消して、代わりに普段と変わらぬ青い海が広がり始めていた。次第に明るくなっていく夜明けの浜辺には、私が付けた足跡だけが残されていた。

波打ち際に佇んで、寄せては返す波に両足を浸していると、水に浸かった部分の感覚が失われて、まるで自分の体の一部がすっかり失われてしまったかのような、そんな錯覚に襲われた。私の隣に拵えたはずの砂の山が、いつの間にか波に洗われて消えて無くなっていたのと同じように。いつかその波が、同じようにこの場所から私を攫ってくれないだろうか。

でも、そこから先には進めなかった。まるで見えない壁に邪魔されるかのように。「あなたはまだ、その時じゃないわ。」と誰かが囁いたように。そして、その時の私はまだ、半熟な存在だったのだから。

夜鳥

野山を飛び回る鳥たちは、その美しい鳴き声で我々人間を魅了してくれる。それらの多くは、自らが発する音によつて、あるものは愛でられ、あるものは崇められ、あるものは恐れられ、あるものは無視されており、その事は広く我々の認知しているところである。しかし、世の中にはまだ、我々が知らない奇妙な鳴き声を発する鳥が数多く存在しているものだ。私が遭遇したのも、その中の一つに違いないと思うのだが、その時の私の精神状態は非常に昂ぶった状態にあつたので、それが果たして実在した鳥が発したもののなのかどうか、今もって定かではない。もちろん、私は鳥類学者では無いので、仮にその鳥が実在する種類であつたとしても、一体何という名前なのかは分からないし、それを知る術も失つてしまった。しかし、今でもその鳥の発する鳴き声は、・・・それが鳥だつたとしての話ではあるが・・・、はっきりと私の鼓膜に残っているのだ。まるで、狂女が漏らす笑い声のような鳴き声を。

その話を聞いた学者達の多くは、それを「ワライカワセミ」ではないかと指摘したものだ。中には、実際にその鳴き声を私に聞かせてくれた者もいたのだが、私が聞いた鳴き声は、決してそんなものではなかつた事を皆様にお断りしておこう。さて、前置きはここのくらいにして、私がその鳥と出会つた時の事をお話するとしてよう。

その日、私は妻と一緒に森に来ていた。私たち夫婦は、世間一般によくあるような、ごくありふれた夫婦だつた。お互いに干渉しあう程に親密という訳ではなかつたが、かといつて一言も口をきかない程に不仲だつた訳でもない。夫婦仲は決して悪くは無かつた。また、二人の間には子供がいなかつたが、それは単に運命の巡り合わせの問題である事を併せて付け加えておこう。

久しぶりの遠出に、妻はとても嬉しそうな表情を浮かべていた。

それを見て、日頃は仕事が忙しく、碌に構ってやれなかつた事で多少なりとも負い目を感じていた私も、同僚に無理を言つて仕事を休んだ甲斐があつたと思ひ、近年感じたことがない高揚した気分を味わつていた。妻はこの日の為に、朝早くから起きだして弁当を作つてくれていた。二人分にしては大きすぎる、三段重ねの重箱が台所のテーブルの上にあつた。まるで遠足に出掛ける前の子供のように、私の中身を覗こうとすると、目的地に着いてからのお楽しみでも言うように、彼女はそれを私の眼の届かない所へと移動させるのだった。

つい先日までは10月も半ばというのに暖かな日が続いていたのだが、ここ数日、急激に冷え込んできたように思う。その影響だろうか、車の窓から見える山並みは、薄っすらと赤く色づき始めていた。助手席に座つていた妻もその事に気がついたらしく、窓の外の景色を熱心に眺めているようだった。赤信号で停車した私が、そんな彼女の方を振り返つてみると、窓ガラスに頭を押し付けるような姿勢のまま眠つているようだった。今日は随分と早起きをさせてしまったのだから、このまましばらくそつとしておいてあげよう。信号が赤から青へと変わった時、私は妻を起こさないよう、ゆっくりとアクセルを踏み込むのだった。

目的地に到着し、車から降り立った私を最初に迎え入れてくれたのは、森の清澄な空気だった。暖房の効いた車内では味わう事の出来ない冷たい空気が、熱に浮かされた様な私の肌を優しく包み込んでくれた。おかげで、長時間運転をしていたせいか、少しだけボンヤリしていた私の頭にも、正常な判断力が取り戻されつつあるようだった。助手席の妻は、少し車に酔つた様子で、非常に具合が悪そうだった。顔が随分と青白くなつている。私はそんな彼女を抱かかえるようにして車から降ろしてやると、肩を貸してやりながら今日の目的地である森の奥深くへと足を運んでいくのだった。

その日の私たちは、非常に運がよかつたようだ。見上げる空には雲ひとつなく、眩しいくらいに輝く光に照らされた紅葉は、その見

事な色彩を惜しげもなく我々の目の前に晒してくれていた。他に觀光客がいなかったのも、まったくの幸運だったと言える。この絵画のように美しい景色を、我々二人だけの思い出に出来るのだから。

車を降りてから、どのくらいの距離を歩いたのだろうか。“そろそろ休憩にしない”と、妻から申し出があった。妻は元来、体の丈夫な方ではない。妻は“少し横になる”と私に告げると、落葉を天然のベッドにして地面に横たわった。“おいおい、そんな所で横になるヤツがあるかい。ちよつと待っている。私が今、寢床を用意するから。”そう私は妻に告げると、彼女が十分に体を伸ばせるような心地よい寢床を準備し始めるのだった。

私は一人、黙々と作業に取り掛かっていた。最初のうちは、“私一人の力で、果たしてそんな事が出来るのだろうか？”という疑問だけが頭の中を満たしていたのだが、月明かりに照らされながら一心不乱に穴を掘っていると、そんな事は何の雑作もないように思えてきた。むしろ、闇夜にぽっかりと開いたその深奥な空間を、如何にすればもっと深く、もっと広くする事が出来るかについて心を砕いており、ただ脳の命ずるままに規則正しく両腕を動かしていたのだった。私がそういった言い知れぬ狂喜に支配されているまさにその時、問題の鳴き声が静寂なる森を切り裂くようにして響いたのだった。巨大な鳥の羽ばたきと共に。そして、それは今でも私の耳にしっかりと残っている。断じて狂気に侵された男の戯言では無いことだけは信じて欲しい。

幼児期における残虐性及びその考察

以下は、X高校で提出されたあるレポートの抜粋である。

これを書いた生徒に該当する新入生は名簿に載っておらず、誰が書いたのかは依然不明である。また、このレポートの中で言及されている作品は実在しておらず、その後の経過並びに詳細について我々が一切の報告を受けていないこと、彼の辿り着いた結論が彼を幸福に導いてくれている事を我々が願っているという事実を併せて申し添えておく。

新入生課題 『幼児期における残虐性及びその考察』

『鏡の中の隠者』という作品があります。この作品自体を読んだ事はなくても、その標題から解離性同一性障害（所謂、二重人格）を想像される方は、近年では多くなったのではないでしょうか。人間の二面性を描いたこの作品を引き合いに出すまでもなく、要するに人の心の中には「規則を破ってはいけない」という道徳性と「規則を破りたい」という破壊性の二律背反が存在しているのです。

さて、この作品の作者であるロナウド・ステファンは、かの児童文学『銀の鉤爪』を書いた作者としても有名なのですが、児童文学というのは案外、陰湿で残酷な内容のものが多かったりするものです。ロベルト・キースの『隠された秘密』なんかはその良い例として広く知られているのですが、ベルモット・パウチの『黒い夜』は家族が崩壊していく話だし、ローズ・ヒルダの『小さな王様』に至っては、過酷な運命を背負わされた主人公が哀れな末路を辿るといって、何とも救いよしの余地が無い作品です。他にも『トマス航海記』

で知られるマーティン・ペインの『奇妙な少年』は、読んでみると非常に厭世的な気分させられるという作品という事で非常に私の興味をそそりますし、児童文学に拘らなければ、ある種の童歌や童話を上げておけば十分でしょう。そういった作品を子供たちがどういう風に受け取っているのか、すっかり成長してしまった私には、皆目検討が付きませんし、直接聞いてみる機会もありませんが、ある種の残虐性や残酷性を子供は産まれもって身につけている、もしくは、それらを自分達の世界を構築している要素の一つに置き換える事で、いとも容易く受け入れる事が出来るのではないかと考えております。それらの作品が彼らに与える影響は、大人が心配するようなそれとは異なったものではないかという事です。

ここに一つの例をあげる事にしましょう。「ある男の子が、バツタを捕まえた」とします。子供の世界には本能的な序列関係が築かれていますので、彼は瞬時にバツタを自分よりも劣る存在であると認識し位置づける事でしょう。男の子がその後「バツタの足をもぎ取る」という行為をしたとしても、両者に存在する絶対的な関係の中では、男の子が“そうしたい”と思えばそうする事が可能であり、バツタはそれを甘んじて受けるしかないのです。ここで、男の子よりも勝る存在（例えばその子の母親）が現れて、「そんな事をしては可哀想でしょう。離してあげなさい。」と一言口を挟めば、例えば渋々であっても男の子はバツタを放してあげる事でしょう。しかし彼がこの時、「バツタを可哀想」と思ったかどうかはこの行為に無関係であり、それこそが子供が産まれながらに持っている残虐性ではないかと思うのです。

次に、不運にもそういった助けを得られなかったバツタが、最終的に弄ばれて動かなくなつたとしましょう。それを我々大人は「死」と認識しており、それが非常に残酷な事であると考えています。しかし、大人よりも「死」からかけ離れた存在である子供が、どの程度その実在性を認識しているものなのでしょうか。男の子にとって

みれば、それは単に今まで動いていたモノが「壊れた」だけであって、我々が考える残酷という感情は起きていないかもしれませぬ。むしろ、そういう風に置き換える事で日常的に発生する他愛の無い出来事の一つとして処理されているのであれば（子供用おもちゃのいかに壊れやすい事か！）、彼の心はそれを残虐な行為であると捉えることは出来ないのです。

ところで、私は限りなく大人に近い年齢なので、模範的な社会人になるべく人前では礼儀正しく過ごし、人を貶める言葉を口にする事もなく過ごしてきましたが、冒頭でも指摘したとおり内面にはそれは矛盾した感情が渦巻いています。しかし、私は善悪を分離させる事が出来る薬に頼るような愚かな真似はせずに、もつと簡易で効果的な別の方法を試みることにしました。それはある方との出会いがキツカケでした。

私が先の考えを“ある方”に打ち明けたところ、その方は「子供は大人よりも善悪を区別する基準が曖昧である」との見解を私に示してくれたのです。そしてその方はこうも告げたのです。「この世に絶対的な善悪が存在しない以上、その境界は非常に曖昧である。大体、善悪などというモノは人間が勝手に作り出した概念に過ぎない。それに縛られているのは愚かだ」と。その言葉を聞いて、自分の目の前を覆っていた暗闇が一気に晴れた気分になった私は、近年にない自由を手に入れることが出来たのです。そして私は彼に請われるままに、私の魂を彼に差し出す決意を固めたのです。その後の経過並びに詳細については後日ご報告する事にして、今回はこれで締めくくらせていただきます。

損なわれた身体

今年の風邪は、すごく性質が悪いらしい。長らく連絡を取っていなかった友達から久方ぶりに電話が掛かってきたため、「それならば一緒に飲みにも出掛けるか！」と街へ繰り出す事にした。そこまでは良かったのだけれども、ビールを二、三杯飲み干した辺りからどうにも鼻の調子が悪い。サツサと切り上げて家に帰ればいいものを、途中で席を外したりして、自分のいない間に何やら面白そうな事が起こったら詰まらないと思い、最初に渡されたおしぼりで鼻を拭いながら、しばらくはそうやってみんなが喋っているのを眺めていた。

そんな私の様子を見るに見かねたのだろう。友人の一人が私に薬を差し出した。「おいおい、アルコールに風邪薬はまずいだろう。」そう私が言うと、「これは風邪薬なんかじゃないぜ。俺が最近開発した薬なのだが、アルコールと一緒に服用しても大丈夫だから安心して飲んで構わない。」などと言う。そいつは現在、凡そ世間にはその名を知られていないほど小さな製薬会社の研究員として働いているのだが、学生の頃には随分と頭の回転が速い事で知られた男だった。もつとも、あまりにも頭が良すぎるためか、随分と突飛な行動が目立っており、周りからは浮いた存在として変人扱いされる事がしばしばあった。しかし、私とは何故か非常に馬が合い、度々答案用紙を覗かせてくれるという榮譽を与えてくれたので、私の方でも何かと彼には良くしてやっていた。そんな訳で、他の誰よりも彼の事については詳しく知っていたし、彼の方でも私の事について微に入り細に渡り尋ねてくるので、包み隠さず教えてやっていた。彼の就職内定が決まった時なども、私も含めて周りみんな「お前だったら、他に幾らでも就職先はあっただろうに、何だつてそんな無名な会社を選んだんだ？」と質問したものである。そんな質問に対し彼は、「俺は一人っ子だから、実家を離れるわけにはいかない

だろ？両親の面倒を見られるのは自分だけだからな。」などと、もつともらしく答えていたのだったが、私にだけは後で「どうしても小さい頃から夢見ていた“ある薬”を作りたいのさ。あの会社だったらそれが出来る。」と打ち明けてくれたのだった。

その時の私はそんな昔の事などすっかり忘れていたのだが、「まさか試供品の効果を俺で試すつもりじゃないだろうな。」と冗談交じりで応じながらも、折角の彼の好意を無にするのも悪いという短絡的な発想により、その薬を有難く頂戴し、その場で水と一緒に飲み込んでしまった。そんな無茶な事をして、どんな副作用が起こるか分かったものではないのだが、体の隅々にまで浸透してしまったアルコールは、元々乏しかった私の思考能力でさえも奪ってしまつたようである。その時には既に、まともな分別など残されてはいなかったのだ。おかげで、どうやって家に帰りついたのか分からないままに、翌朝気がつけばベッドの上で眼が覚めていた。

ぼんやりした記憶を手繰り寄せてみると、何となく「締めはラーメンを食いに行くぞ！」とか叫んでいたような気もするが、定かではない。余程前後不覚になるまで飲んだのだろうかと自問自答してみるのが、ばらばらに散らばった記憶の断片は、まるでジグソーパズルのようにぶちまけられており、残念なことにそれを組み立てて完成させるだけの根気も努力も私には備わっていなかった。その一方で、友人の渡してくれた薬は驚くべき効果を發揮してくれたようで、昨日まであれほど私自身を悩ませていた鼻水の方はすっかり止まっており、しいて不都合を上げるとするならば、おしぼりで散々鼻を拭っていた事による肌の炎症くらいだったが、それは自業自得というものである。指で触ってみると、鼻の周りがやけにザラザラしているのが、まるで自分の皮膚を触っているのではないように感じられた。

風邪も少しは良くなったようだが、まだ少しだけ熱があるようだった。どちらにしても、二日酔いのせいでまともにベッドから起き上げられる状況にはなかったし、休日だったのでもうしばらく安静に

している事にした。そう決断するが早いか、私は再び布団を被り、甘美なる眠りの世界へと出発したのだった。

病床で高熱にうなされている時というのは、人はしばしば妙な幻覚に襲われるものだ。その時の私も、夢と現の狭間において激しい動悸と全身の骨が軋むような感覚、頭痛と多少の吐き気（これは二日酔いの影響だと思うが・・・）を感じていた。こういった状態の時には日常の一切の正常な感覚というのは失われるようで、伸び縮みする歪んだ時間軸の中を、私は無限とも思われる幻に苛まれ続けていたのだった。

暗闇の中を手探りで彷徨っている旅人を導いてくれる一条の光明のように、私の朦朧とした眠りの世界は、携帯電話のアラーム音によつて破られた。手探りで携帯電話を手に取りスイッチを切る。体調もすっかり回復した私は、とりあえず起きてシャワーを浴びることにした。脱衣所で服を脱いでいたその時、私は自分の体に起こった異常に始めて気がついた。私はどちらかという浅黒い肌をしていたのだが、全身見渡してみると真っ白な絹のような肌にならなっていた。髪の毛も茶色がかつた癖のあるものであったが、今では真っ直ぐな黒髪へと変わり、腰の辺りまで伸びていた。何よりも変わっていたのは、私が男性から女性へと変貌を遂げたことである。鏡に映っているそれは、昨日まで見慣れた私の姿ではなく、私が今までに出会った事もない、しかし誰もが見とれるような、非常に美しい女性の姿であつたが、それは間違いなく私自身だった。その証拠に、私が右手を上げると左手を上げ、私が微笑むとこちらに向かつて天使のような笑顔を浮かべてくれた。どんな奇跡が起きたのかは分からないが、私はまったくの別人に生まれ変わってしまったのだ。

混乱している私の耳に、携帯電話の着信音が聞こえてきた。急いでそれを手にしてみると男性の声が聞こえてきた。「やあ、おはよう。もう十分薬の効果が始めている頃だと思って電話したんだ。」

何も知らされていない君がショックで倒れたらいけないからね。」彼は気軽な調子で私に告げた。そして、一瞬の間を置いて彼はこう付け加えた。「実は今、君の家の近くまで来ているんだ。詳しい事は会って直接話したほうが分かりやすいだろ？もうじき到着するから、しばらくそのまま待っていてくれ。」それだけ告げると、私に構わず一方的に通話を打ち切ってしまった。

数分後、玄関に設置されたインターホンが部屋に鳴り響き、扉を開けた私の目の前には、まったく見知らぬ男性の姿があった。それはまるで、最近人気の若手俳優にどことなく似た顔立ちをしており、同性の私の眼から見ても十分に魅力的な存在だった。しかし、私にはそんな知り合いなどいないので、「一体誰なのか」と尋ねると、相手は私の質問にひどく驚いた表情を浮かべたのだが、すぐに気を取り直すと「俺だよ。これほどの効果を上げるとは、想像もしていなかったな。」そう言って、私の了解を得ないままに無断で部屋へと足を踏み入れると、女性の姿になった私をしっかりと抱き締めるのだった。「一体どういうつもりだ！」と私が言うと、彼は悪びれる風もなく「男女が抱き合う事がそんなにおかしいのか？」と答える。「馬鹿なことを言うな。私はれっきとした男だ。」と彼を突き放そうとするのだが、背中まで回された彼の腕はそう簡単に振り解くことは出来なかった。「誰がどう見たって、今のお前は女だろう。それは自分自身が一番分かっているハズだ。それに、こうして俺に身を委ね事に、密かな期待を感じていたのだろう？」彼がそう指摘したとおり、私はとても幸福な気分に浸っていた。病み上がりの私の体は、一人で立っていられる程には回復していなかったし、先ほど示した抵抗や口にした言葉とは異なる感情が、私の中ではジクジクと渦巻いていたからだ。この混乱した世界を全てありのまま受け入れるほうが、この世界を否定することよりも容易く思えた私は、まるで熱に浮かされでもしたかのように、この不穏な関係に酔い痴れていた。「こうして抱き合っていると、今まで失われていた自分の半身と融合できた気がする。」二人はほぼ同時にその言葉を口に

していた。私を今まで男性として縛り付けてきた肉体が損なわれた今、私自身は、彼女を抱いている男性なのか、彼に抱かれている女性なのか、その境界は当事者である私でさえも定かではなくなっていた。ひよつとしたら、私はその両方なのではないか、そんな疑問がふと頭をよぎる時もあったが、真相など最早どうでもよかつたし、知りたくもなかった。

私の眠りは、再び携帯電話のアラーム音によって破られた。目が覚めた私は、一瞬自分が何処にいるのか分からなかったのだが、何の事はない、自分のベッドの上で布団に包まれているのだった。テーブルの上には、私が昨日、近所で購入してきた市販の風邪薬と空になったコップだけが置いてあった。私が携帯電話を手に取り着信履歴を見ると、それを確認する前から予想できたとおり、ここ最近の友人からの着信履歴は一件も記録されていなかった。

奥さん、お届け物です！

最近では便利な世の中になったものです。インターネットが普及したおかげで、どんな情報でも簡単に手に入れる事が出来ますし、世界中の誰とでも瞬時につながれます。メールのやり取りなんていうのは、もう日常生活の一部ですからね。そんな中でも“ネットショッピング”、あれは便利ですね。お店に行かなくても好きなものが買えるのですから、これは助かります。CDなんかはお店に出掛けずとも、ネットでも買う方が安かったりするので、馬鹿馬鹿しくてお店で買う気は無くなります。もちろん、新品だけでなく中古品も取り扱っているのは嬉しいですよ。ネットで検索すれば一発で欲しいものが見つけれられるのですから、探す手間がかからない！古本などは色んなお店をあちこち駆けずり回って、掘り出し物を探し当てるっていう楽しみも、それはあつたりしますがね、欲しいものが簡単に、しかも安く手に入るってというのは有難い事じゃないですか。

インターネットで注文した商品というのは普通、宅配便で自宅まで届けられる仕組みになっていて、早ければ翌日にはもう自分の手元に届くって話ですから、日本の流通はしっかりしております。聞くところによると、最近は物に限らず生鮮食品なんかネットショッピングで手に入れられる事も出来るのだとか。賢い主婦の中にはネットショッピングを使いこなして無駄な出費を減らし、余ったお金で自分の好きな物を購入している方もおられるのでしょうか。今度、隣の奥さんに聞いてみるとしましょう。

さてさて。そんな話を妻が私に向かってするものですから、“これは何か裏があるな”と思い、話の後半辺りから新聞記事を熱心に読んでおる振りをしていたのです。案の定、「あなた。そんなに便利なモノなら、私もやってみたいわ！」などと、最近では滅多に耳

にする機会もなくなった甘えた声で、私の方へと擦り寄ってくるのです。近頃は随分と冷え込んできましたから、私の背筋を一瞬ゾクゾクと寒気が走ったのですが、そんな素振りを見せるでもなく、「お前、そんな事言っつて、またすぐに飽きてしまふのだから？」と、つい最近まで流行っつておりましたダイエツトグッズの名前を一つ一つ上げ連ねてやりました。まあ、その程度の事で引き下がる訳もなく、「今回はそうじゃないわ。それに、あなたのお仕事にもきつと役に立つはずよ！」と、夫婦共通の利益を持ち出して説得を始めるのですから、相手もなかなかのやり手です。正直私自身、多少なりともインターネットというものに興味が御座いましたし、聞けば色々々々・・・ココでは非常に申し上げにくいのですが・・・使い道があるという事は職場の男連中から聞かされておりましたので、「しよがないな。」と、さも恩に着せるようにして了解してやったのです。

そんな訳で我が家にもインターネットが導入される運びとなり、設置が終わるのを待ちかねたようにネットショッピングを試してみました。私も妻も最初のうちは、ボタン一つで注文が確定してしまふ事へ非常に違和感を覚えていたのですが、何度となく使っているうちに、やがてそれが至極当たり前の、何でもない作業のように思えてきたのです。まったくもって、慣れというのは恐ろしいものです。そんな訳で、使い始めの頃こそ、近所のスーパーでは手に入らないような特別な物だけを購入していたのですが、次第に我が家で使用する全ての物をネットショッピングにて賄うようになってしまったのです。ある時などは、夕飯を作っている途中で妻がパソコンに向かい始めたので、「おい、何をやっているのだ。鍋がふきこぼれるぞ！」と注意すると、「お醤油を切らしちゃっつていて。」と事も無げに答えます。「そんなもの、コンビニかスーパーで買っつてくればいいじゃないか。」と私が言いますと、「駄目よ。ネットで買っつた方が安いよ。」と、こう申すのです。こうなりますと、も

う病気としか言いようが御座いませぬ。しかしそれはまだ序の口でして、「そろそろペットが欲しいの。結婚する前にあなた、私に話したことがあったわよね。将来は一戸建てに住んで、犬でも猫でも良いけど、何かペットを飼おう”って。」と言いだしたのです。私が「そんな事、言ったかな？」と口籠っておりまして、妻は随分と怒り出して「結婚する前にあれほど二人で約束したのに、もう忘れてしまったの！」と詰問を始めるのです。所詮は記憶力で女性に勝とうなんて無理なお話。ここは素直に相手の言うとおりにしておくのが家庭円満の秘訣で御座いますから、「分かったよ。お前の好きなペットを買いなさい。」と承知すると、現金なもので、すっかり機嫌が直ってしまい、鼻歌なぞを歌っております。当面の危機を無事に回避する事が出来てホッと胸を撫で下ろしながらも、そのせいで来月以降の私の小遣いが減らされなければ良いがなあ・・・などと考えております私の側で、妻は一向に出掛ける準備をする様子が見られない。それどころか、パソコンの前に座って画面を眺めているのです。「おいおい、まさかペットまでネットショッピングで買うんじゃないだろうな？」と尋ねますと、「あら、あなた知らないの？最近は何もネットでも買えるのよ。」との事。物を宅配便で遣り取りするのはともかく、生き物を送り届けるのはどうだろうかという私の考えは完全に覆されて、数日後に届けられた段ボール箱の中からは元気なミニチュアダックスフンドが飛び出してきました。物だろつが生き物だろつが、およそ物流業界において扱えない品物は無いようで御座いまして、まったくもって恐ろしい話です。

その後も、妻のネットショッピング熱は冷めるどころか、まるで悪性腫瘍か何かのように彼女を蝕んでいき、私としても手の施しようがなくなってしまうました。更に困った事には、私の妻を発生源とするこの病気は非常に感染力が強く、瞬く間に附近一帯に広がってしまいました。辛うじてその病気に感染することを免れたとしても、家族の一人でも感染者がいる場合には、“インターホン恐怖症

”（連日のように送り届けられる宅配便の到着を告げるインターホンの音が、いつしか空耳でも聞こえるようになってしまい、落ち着いて生活する事を困難にする症例）を併発してしまうのでは。一刻を争う事態へと発展したこの状況を重く見た我々は、お互いに協力し合ってこの難局を打開する方法を探るべく、いつしか近所のファミリーレストランにて集会を開くようになったのでした。

その日、私は覚悟を決めると、「こうなってしまうては、残る手段は一つしかありません。あれを試してみようと思います。」と、集まった一同に告げることにしたのでした。「今回の一件は、元を正せば私の妻から始まったこと。既に手筈は整えておりますので、あとは実行に移すだけです。」その私の言葉に「しかし、それは最終手段。あまりにも危険が伴うのではないだろうか。」と、私の身を案じる声がかしこで沸き起こったのでした。そのため会場は一時騒然となり、收拾がつかない混乱状態に陥るかに思われました。そこで私は立ち上がると、「病気を治すためには、その原因を元から断たなければなりません。これ以上みなさまに迷惑をかける訳にはいかない。」と、重ねて表明したのです。私の決意の固さを知った同士一同は、それ以上何も申しませんでした。

翌朝、私は仕事の関係で長期出張に出掛ける予定になっておりました。私は妻に「出張中に私宛の荷物が届くと思うけど、届いたらすぐに開封して中身を出しておいてくれないか？何しろ生き物が入っているからね。」と、お願いしました。それを聞いた妻は私に「あら、ペットならこの前買ったじゃない。今度は何を買ったの？」と尋ねるので、「人が隠れる事が出来るくらい大きな箱で重たいから、届いたらその場で開けてくれて構わないよ。後は中身が勝手に動いてくれるから。」と、それだけ告げる事にしました。これで万事、手筈は整いました。本当に、最近では便利な世の中になったもの

です。インターネットが普及したおかげで、どんな情報でも簡単に手に入れる事が出来ますし、世界中の誰とでも瞬時につながれます。おかげで、今までだったらどうやってコンタクトを取ったらいいのか分からない特別な相手とでも、簡単に、素早くコンタクトを取ることが可能です。しかも、最近の宅配便は生きた“モノ”も送ってくれるのだから、便利です。私は何も知らない顔で出張から帰って来る、それで全ては解決しているハズなのです。

覗き見るもの

夕立というのだろうか。あんなに晴れ渡っていた空を覆いつくすように広がった黒い雲は、雷鳴と共に大粒の雨をもたらした。“バケツをひっくり返したような雨”とは上手い喩えだと思う。そんな天気だった。雨具を携えて出掛けるほど用意が良い方でもないのだが、そうかと言って、これ程の土砂降りの中を好き好んで濡れて歩くほど無頓着な性格でもない。繁吹きに追いつて立てられるようにして、ただ闇雲に通りを走り抜けていた。

勢いよく駆け出したところまでは良かったのだが、すぐに息が上がつてしまう。目に付いた軒先に逃げ込むと、ようやく我が身を振り返ってみるだけの余裕が出来た。やれやれひどい目にあつたものだ。あれだけ急いで走つたところで大した効果はなかつたようで、見事に全身ずぶ濡れだった。ハンカチを取り出し、とりあえず濡れた髪の毛を拭きながら、ボンヤリと辺りを見回してみた。

普段通りなれた道を歩いているものとはばかり思つていたのだが、こんな場所があつた事に今までまったく気がつかなかつた。降りしきる雨を透かして見える建物は、今時としては珍しい格子の嵌め込まれた木造家屋であつた。地面から膝くらいの高さに埋め込まれた白黒の市松模様のタイル。紅殻塗りの施された格子で覆われた壁面。二階へと視線を向けると、路面に面した部分をほぼ埋め尽くすように設えられた白い襖障子。それを縦断している紅殻塗りの手摺格子。一階と二階は赤褐色の石州瓦によって分断され、軒先からは勢いを増した雨が、滝のように轟々と地面へ流れ落ちていた。更によく見れば、至る所に鯉や松の見事な彫り物が施され、釣燈籠も幾つか下げられていた。

雨の日というのは風情のあるものだ、と勝手に思い込んでいた私は、今の状況に些か落胆していた。澄み切った青色か、濁りのない白色にでも見えると思っていた景色は、実際にはくすんだ灰色しか見えない。アスファルトに叩きつけられる雨音は喧しく響き、濡れた衣服が冷え切った体に纏わりついて、無性にやり切れない気持ちにさせられた。

そんな中、目の前の釣燈籠に灯りが点された。それは端の方から一つずつ、ポツリポツリと白く光っていき、瞬く間にその一角を明るく照らし出し始めた。紅殻に特有の赤錆色と真っ白な襖障子が、灰色に燦る雨模様の中で鮮やかに浮かび上がる。およそこの場に似つかわしくないその光景を眺めていると、胸の奥がひどく掻き乱される気がした。

その後も雨の勢いは、一向に衰える気配をみせなかった。降り始めた時よりも益々その勢いを増してきたように思える。これ以上雨宿りをしていても、埒が明かない事は自分自身が良く分かっていた。それなのにどうしたものか、目の前に立っている建物から目が離せなくなっていた。これから何かが始まるような、そんな言い知れぬ期待感が沸き起こり始めていた。

ふと、私が二階に目をやると、先程まで固く閉ざされていた筈の障子戸が開け放たれ、部屋の中から長襦袢を着た女が姿を現していた。この大雨が振りしきる最中、自分の足元すぐ近くで雨宿りをしているような酔狂な男がいるとは、この女でなくても想像もしていないだろう。寝乱れた髪の毛が随分と妖艶な雰囲気を醸し出していたが、それとは不釣り合いな物を手に握っていた。それは“てるてるぼうず”だった。さしずめ、この大雨が早く止みますようにとの願いを込めて、軒先にぶら提げるつもりなのだろう。爪先立ちしてようやく手が届く高さに結わえようと、女は先程から一心に腕を伸ばしていた。おかげで、女が腕を上げ下げする度に襦袢が崩れて肩が

露わになり、合わせからは白い太腿が覗いて見えた。女がこちらに気付かないのを良いことに、私は息を殺して、そのあられのない姿を食い入る様に眺めていた。女が部屋に戻った後もしばらくの間、再び女が姿を現さないだろうかと、期待に胸を弾ませながら、同じ場所を見上げていた。

どのくらいの時間、そうしていたのだろう。気がついた時には、あれ程激しく降っていた雨もすっかり止んでいた。こうなってみると、自分の行動が随分と浅ましく思えてならず、極まりが悪くなつてその場を立ち去る事にした。最後に何気なく、目の前の建物へと別れの一瞥を投げかけた時、思いもよらぬ視線とぶつかった。それは、注意して見なければ分からない程僅かに開かれた障子の向こう側からだった。外光の差し込まない暗がりの中でも妖しく光る白い物体がハッキリと見て取れた。その何者かは、私の視線を捉えると慌てた様子で障子を閉めた。その勢いがあまりにも強かったため、障子の閉じられる音が辺りに響くほどだった。それは、先程までの私の行為を咎めるかのような響きに聞こえた。その瞬間、私を満たしていた淫らかな喜びは一気に消し飛んでしまい、私はその場所から逃げるようにして走り出した。そして、決して後ろを振り向くことはしなかった。

目覚めの時

ベッドの上に起き上がる。今日もまだ、こうして生きていた。部屋の中は昨日、寝る前に見たのと同じままだ。正常な秩序などとうの昔に失われてしまい、倒れたタンスに散乱した衣服、ぶちまけられた雑誌の中から水着の美女がこちらを向いて、眩しいばかりの微笑を浮かべている。その隣では、誕生日プレゼントとして無理やり贈られてきた百科事典が中途半端なページで開かれおり、折り曲がっていた。こんな物を未だに後生大事に持ち続けているのは、単に廃品回収に出しそびれたただだったが、こうして見ていると案外、その分厚い紙の束の中にこそ、これからの自分が生きていく術のよなもの、が隠されているのかもしれない。そんな妄想がふと頭を過ぎる。それらの貴重な遺物を華々しく飾るかのように、辺りには割れたガラスの破片が散らばっていた。底の抜けた天井から差し込む朝の光が、スパンコールのように散りばめられたガラスに反射し、鮮やかに煌いて輝いていた。この部屋の中で唯一、無傷な状態であるベッドの上から見渡せる世界なんて、せいぜいそんなところだった。

汗臭いシートと黄ばんだ布団を押しつけて、地面へと降り立つ。居間へと通じる一つだけある道を通って部屋から抜け出す。その途中でまだ着られそうな衣服を探し出しては、手早く身に纏っていく。つて事は、もちろん忘れてなんかいない。靴下の片一方を何処かに紛失してしまったようだが、こんな事もあるうかと同じ縞柄の靴下を何足も買い揃えておいて良かった。実際には少しだけ色の褪せ方が違っているのだが、よくよく注意してみなければ分からないし、そんな事を気にする奴なんていない。

居間に辿り着くと、昨日から点けっぱなしにしていたTVが白黒の画面を映し出していた。正確に言うと、点けっぱなしというのは

適切ではない。見たくも無いのに勝手に映るのだ。コンセントを引っこ抜いてしまえば全て問題は解決するかもしれないのだが、TVから流れてくる雑音なんて、隣の家から毎晩聞こえてくるベッドの軋む音や、近所のクソガキが立てる騒音に比べれば何でも無い。むしろ、クラシック音楽を聴く時くらいに、右の耳から左の耳へと自然に通り返ってくる。余計な妄想や苛立ちを覚える要素は一つも無い。

最近は何処かで戦争をおっ始めるとかおっ始めないとかいうニュースばかりで、どのチャンネルを回してみても、画面に登場するのはすっかり見飽きたこの国の象徴と呼ばれる政治家だけだった。お決まりの紺のジャケット、赤いネクタイ、白いワイシャツ。TV映りが良くなるようにと、その顔にはご丁寧にドウランが塗りたくつてある。彼が演題に立って拳を振り上げ、唾を飛ばす勇姿を、どれ程の人が注意して見守っているのだろうか？決まった時間に決まった映像を繰り返し流してくれるTVに、きっと誰もがウンザリしている頃だと思う。それを解決する唯一の方法は、そんな事を気にしないって事だろうな。その音がまるで、冷蔵庫から漏れ聞こえてくるモーター音のようなモノと考えるとすれば、いつの日かそんなもの、まったく気にならなくなるはずだ。いつか試してみると良い。

今日に限って珍しくそれが映っていないという事は、きっとそんな対処方法を見出せずに我慢出来なくなった何処かの誰かが、TV局に乗り込んで全てをぶち壊してくれたのだろう。拍手喝采だ！さもなければ、例の政治家がどこかのアバズレとイチャついてる現場をマスコミに押さえられて、自宅に引き籠もっているのだろう。そのどちらかに決まっている。離婚届が突き付けられるのは時間の問題だろうが、妻の方でも顧問弁護士とよろしくやっていただけから、慰謝料は請求されないのが一つの救いだだろうな。国民の利益を声高に叫ぶその口で、夜な夜な不倫相手への睦言が漏れていたのかと想像すると、誰も彼も信用なんか出きる筈もない！まあ、それでこそ人間らしいといえなくも無いが……。

テーブルに置かれたトレイの中には、食べかけのピザが一切れ残っており、ビールの空き缶が転がっていた。流石にもう食べられそうにないから手もつけないが、世界では「パイ」を奪い合って争いが起こっているというから、是非ともお裾分けしてあげたいものだ。こんな栄養にもならないものばかり食っていたら、そのうち望んでもいない瞬間にくたばってしまうだろう。「ピザとビールが大好きで、それが最後の晩餐でした」なんて、神様に報告するのは気が進まないが、今世紀最大のジョークとしては悪くない。試してみる価値はあるかもしれないが、お気に召さずに地獄に突き落とされるのは御免だ。冷蔵庫の中を探ってみる事にしよう。もしかしたらまだ、缶ビールの1本くらいは残っているかもしれない、そう思っただ、扉を開けてみるが・・・缶ビールの1本も残っていない。こんなクソみたいな場所に引きこもっていたら気が滅入るばかりだ。込み上げてくる吐き気を抑え込みながら、這う様にして玄関まで進み、お気に入りの黒のコートを着込む。「外出する時にはこれを着ていけ」ってうるさいんだ。まあ、ママの言うことには逆らわない事が賢明さ。まず間違いない。世界中の奴らを敵にまわしても、それだけは確実だ。今となつては、後ろを振り返つたところで誰も送り出してくれる訳でもないのだが、自然と片手を上げてみる。この忌々しい檻から開放されるんだから、別れの挨拶くらいはするのが当然だろう。踵の磨り減った靴をつっかけると、既にその機能を失ってしまった扉を開けて外へと出掛けた。

昨日までの騒乱が嘘のように静まり返った街は、人影は見当たらなかった。この辺では有名な並木道も、すっかり紅葉で色づいていた。辺りを覆いつくす瓦礫の山とそこら中に転がっている塊は、誰が手を加えるでもなくやがて真つ赤な絨毯で覆い隠される事だろう。それで無くても今年は大雪が降るに決まっている。真つ白なシーツを被せてしまえば、その下にあるガラクタは目に入らなくなる。こ

れほどお手軽な後片付けは他にはないな。

未だ消えやまぬ立ち上る煙と硝煙の臭い。乾いた赤色が黒いアスファルトの至る所に飛び散っている。ぼっかりと陥没した路面、抉られた地面。それを包み込んでいる空は、最近では滅多にお目にかかる事も出来なかつたほど青く透き通り、遙か遠くの宇宙の果てで浮かんだままの無人の機械が、この星の周りをグルグル回り続けているのがハッキリと見えそうだった。

一体、こんな事にどういう意味があるというのだ。何を手に入れようとしたのだろうか。幼い子供が癩癩を起こして全てをぶち壊してしまうような騒ぎだ。自らの犯したこの惨状を見たママに、後でこっぴどくお説教をしてもらおうといい。そして、泣きながら許しを請うんだ。「ママ、もうこんな事は絶対にしないよ。だから今度だけは許して。お願い。」いい加減そんな簡単な事に気がつけばいいのだが、何十年、何百年、何千年と経つても、ガキはガキのままらしい。誰かが間違いを指摘してやらないといけないんだ。

創造と破壊を繰り返して、それで前に進んだつもりでいるらしいが、気がつけばスタート地点に逆戻りしている。そんな事をいつまでも繰り返していたら、何かが変わったって確信はいつまでたっても手に入りやしないのに。太陽が昇って朝が来て、月が輝く夜になり、また朝が来る。季節は巡り、春がくれば植物は芽吹き、夏になれば立派に成長しても、秋になれば枯れ始め、冬になれば全てがひっそりと静まり返る。その繰り返した。「それが自然の摂理なのだよ！」なんて賢しい言葉を吐くツモリは更々ないさ。ただ、この無意味な愚かさには少しだけ同情しているんだ。何しろ、他のヤツらと同様、大きな流れの中でもがき苦しんで、動かされているだけに過ぎないのだから。自分自身の意思に基づいて行動していると思っっている、愚かなる劇中の登場人物は、全能なる脚本家の手によって動かされているだけだ。不要になれば舞台から引き摺り降ろされ、気が向けば再び舞台に追い遣られる。それだって全て、幕が上がって

いるときだけの話。全ては舞台の上の、スポットライトが当たっている場所で繰り広げられる喜劇。・・・それでも求め続ければ、いつかは報われるのだろうか？

十五時ちよつどの待ち合わせ

まさに冬と呼ぶのに相応しい季節だった。

見上げた空にはここ数日と同じように灰色の厚い雲が重く押し掛かつており、申し分ないほどに憂鬱な午後だった。幾層にも塗り固められた灰色の雲。それを取り囲むように創り出された青色の空。その二つが織り成す狂騒は、我々の知らない遙か遠くまで、果てしなく広がり続けているのだった。

時折顔を覗かせる太陽は、深遠なる海底に眠る財宝のように眩い煌きを湛え、決して誰の手中にも収める事が出来ない孤高の存在として宙にあつた。それでも稀に、雲の隙間から片鱗を閃かせるその姿は、まるで気まぐれな女神が偶然にもこちらを振り向いてくれたばかりでなく、思いがけず優しい微笑を浮かべてくれたかのようだった。

しかし、それとてほんのつかの間の出来事である。吝嗇な見世物師が見物客の目に触れぬ場所で寸分の狂いも無いほどに正確にその時間を計ってでもいるかのように、幕は閉じられ、我々の目の前から遠ざけられてしまう。そうなってしまうと、ただじっと待つ事だけしか出来なかった。

街の中心部を走るけやき並木通りには、その名の由来ともなった見事なけやきが何本も植えられており、移り行く季節の中で様々な姿を道行く人々の目に供していた。春に芽吹き始めた若葉は、夏には深緑の傘となって上空から照り付ける日差しを遮り、秋には赤や黄色のネオンとなって足元を照らしてくれていた。今はただ、過ぎ去った過去を懐かしむかのような細い枝だけが、虚空へとまっすぐに伸びているだけだった。

両側を高層な建築物に取り囲まれたこの通りにあつても、肌を刺す冷たい風は容赦なく吹き抜けていた。今日は今年一番の寒さになるであろう事を、朝のニュースでもしきりに放送しており、街行く

人たちはみな厚手のコートを身に包み、厳しい冬の魔の手に捕らえられてしまうのを恐れでもするかのようには、わき目もふらず足先に先を急いでいた。そして誰もが申し合わせたかのように、黒や灰色といった暗色の衣服を着て歩き回り、その通り過ぎた後を吐き出された息が白い煙となって棚引いているものだから、街中が全てモノトーンに染められてしまったかのような感じだった。

いつもと変わらぬ街の景色を、私はただ何となく眺めていた。

そんな私の目に、大きなシオルダーバックを提げた男が、通りの向こう側をこちらに向かつて歩いて来るのが目に留まった。バックの中に何が入っているのかは検討もつかなかったが、男の肩に食い込んでいる様子から見ても随分と重そうな荷物のようなようだ。辺りを窺うようにして歩くその姿は、まるで知らない街で道に迷い、途方に暮れている旅行者のように見えなくもない。

男が私の注意を引いたのはその挙動だけに留まらなかった。青白く頬のこけた顔からは生気が失われており、何日も食事を取りそこなった放浪者か、病院から抜け出してきた患者か、乗り物に酔って気分を悪くした旅行者のいずれか一つであるように思えた。そのいずれにしても、精神的にも肉体的にも衰弱しきっているであろう事は傍から見ても明らかだった。

その他にも、薄くなつた眉毛と暗い洞窟を思わせる落ち窪んだ眼窩をしており、そこから覗く二つの眼球は熱にでも浮かされたかのようにキラキラと光っていた。顔の大部分を占めている鼻は細長く尖っており、その下できつく結ばれた薄い唇は、それを見る者に理知的な印象を与える代わりに、酷薄な印象を与えるのだった。いずれにしるそれら一つ一つが重なりあつた男の顔は、これまでに見たこともない程に不快な存在へと昇華されていた。

男の方でも、自らの顔が他人に与える影響を自覚しているのか、顔を覆い隠すように前髪を伸ばしており、後ろ髪は肩甲骨に届くまでに長かった。だからと言って、その姿を見て彼を女性と勘違いす

る気遣いなどは無いと思うのだが、そう思っている側から男に声を掛けている一人の若者の姿があった。

男の表情を覗き込んだ若者の反応は、こちらが同情したくなるものだった。何故なら、男は世界中のあらゆる不幸が一時に自分の身へ降りかかってきたとでも言わんばかりの暗い表情を浮かべており、若者は衝撃のあまり声を発する事も出来ずにその場で立ちすくんでしまったからだ。若者を驚かせてしまった事に対し、男は些か申し訳なさそうな笑顔を見せたのだが、その歪んだ笑い顔は若者を更なる恐怖に凍りつかせる効果しか生み出さなかったようだった。

そうこうしているうちに、男と私の距離は随分と縮まっていた。どうやら男の方でもこちらの存在に気がついたようだ。先程までの表情とは明らかに違う表情を浮かべて、一直線にこちらに向かって歩いて来た。それはまるで、誰かの不幸話を聞いた時に「それはそれは、大変な事で・・・」と口にしながらも、内心それを楽しんでいくかのような表情だったが、それこそが男の示す得る喜びの表情であつた事は、その後の男が発した言葉から推測する事が出来た。

「いや、助かりましたよ。こんな所に交番があつて。」

男の声は金属的な響きを持っているのにも係わらず、籠もつて聞き取りにくかつた。そのせいで私は一瞬、男が外国語を話しているのではないかという錯覚を覚えたのだった。更に拙い事には、その言葉遣いとは裏腹に男の表情からは悪意しか感じる事が出来ず、遠くから見えていた時よりも余計に不快な印象を私に与えたのだった。こんな男とはあまり係わりあいになりたくはなかつたが、仕事の一つとして対応せざるを得なかつた。

「何かお困りごとでしょうか？」

「ええ。実は道に迷つていまして、待ち合わせの時刻に遅れそうなのです。この日のために、はるばる遠方からやってきたんですけどね。」

そう言つて、男はこの近所の住所を告げるのだった。そうすると、男はやはり旅行者だつたのだ。男の表情が優れなかつたのも、長旅

による疲労が原因なのだろう。私はこれまで自分が抱いてきた男への悪意に対し、少しだけ後ろめたい気分になっていた。尋ねられた住所を教えてやると、まるでその埋め合わせをするかのように、男に対して優しい言葉を掛けてやった。

「随分とお疲れのご様子ですが、どこか具合でも悪いのでしょうか？」

「仕事で世界中を飛びまわっているものですから、疲れが溜まっているのでしょうか。今回の仕事が終わったら、久々に休暇を取ろうと思います。」

「そうですね。それは大変ですね。一体どのようなお仕事をされているのですか？」

「追従のつもりで私がそう尋ねたのを、男は好意的に受け取ったよ。うだ。」

「そうですね。待ち合わせの時刻まではまだ時間がありますし、少しこちらで時間を潰させてもらっても構わないでしょうか？」

男は私の了解を得るまでもなく、目の前にあった椅子に腰掛けてしまった。私は、自らが犯した失言の代償を払わされる破目に陥った事を後悔しつつも、この奇妙な男が何を話すのか、少しばかりの興味を抱いていた。

「私の仕事は・・・そうですね、例えるなら“ガイド”みたいなものです。そう聞くと、随分可笑しく思えるでしょうね。道に迷ってこうして交番にいるのですから。」

「いえ、そんな事はありませんよ。世界中を旅行出来る仕事っていうのは羨ましいですね。私などは一度も海外に出かけた事がないので。」

「旅行といっても仕事ですからね、そんなに良いものではありませんよ。」

「今回もお仕事の都合で旅行されているのでしょうか？」

「ええ。15時にお客さんと待ち合わせしているのです。この仕事は時間が大切ですからね。一分、一秒といえども疎かには出来ない

のですよ。」

男にそう言われて、私は壁に掛けてあつた時計を振り返つた。現在の時刻は14時30分。私が再び振り返ると、男はいつの間にか一冊の本を取り出して、ページを捲っていた。それは百科事典ほどの分厚さがあり、旅行者が持ち歩くには些か不似合いな代物であつた。

私の視線に気がついた男は、その本をバツクの中にしまいこんでこつと言つた。

「あれは顧客名簿なのですよ。なにしろ世界中にお客さまがいるものですから、こつして旅行先でも一緒に持ち歩いているのです。もちろん、仕事に関する大事な資料ですので、この場でお見せする事は出来ませんが……。」

そつ言つて、あのゾツトするような笑顔を見せるのだった。

私は話題を変えるように、先程から気になつていた質問を男に投げかける事にした。

「ところで、そのカバンの中には一体何が入っているのですか？先程からとても大切にされているご様子ですし、随分と重そうですね……。」

ほんの一瞬であつたが、男の眼が怪しげな光を放つた。

「私は世界中を旅行しているのですが、旅先で妙な物を見つけては買つてしまう癖があるのですよ。これなんかは、この前の旅行で買ったのですが……。」

そつ言つて、カバンの中から木彫りの人形や仮面を取り出すと、それらの品々の由来について一つ一つ丁寧に私に教えてくれるのだった。私はあまり興味なさそうにそれらの品々を眺めていたのだが、一つだけ私の興味を惹いた物があつた。それはこの男の持ち物としては相応しくないような、見事な装飾の施された箱だった。

「おや？この箱には何が入っているんですか？」

そつ言つて私がその箱に手を触れよとした瞬間、突如として男の手が伸びてきて箱を私の目の前から隠してしまつた。

「おっと！申し訳ないが、この箱の中身はお見せする訳にはいかないのです。特にあなたのような方にはね。」

男は、私の反応を楽しむかのように嬉しそうな表情を浮かべて言うのだった。

「そう言われると、余計に中身が何か気になるじゃないですか。見せてくださいよ。」

「そうですね。中身をお見せしても構わないのですが、一つ約束をして欲しいのです。“この箱の中身を見ても、絶対に驚かない”とね。」

男は、真剣な表情をしながら私にこう言った。

「ここ最近、市内で5件の殺人事件が発生している事は、警察官であるあなたならご存知ですよ。確か、犯人はまだ捕まっていないとか。」

「一体、何を仰っているのかわかりませんが……。」

「まあ話は最後まで聞いてくださいよ。その殺人事件には世間には知られていないある共通点がある。そのため、警察当局は同一犯による連続殺人事件として捜査を進めている。違いますか？」

「……。」

「この箱の中に、世間では知られていないその“モノ”が納められているとしましょう。ところで、それを持っているその男は一体何者でしょうね？」

それだけ言うと、男は椅子から立ち上がり部屋を飛び出してしまった。それを見た私も、本能的に男の後を追いかけて部屋を飛び出したのだった。

『ニュースです。本日午後3時、けやき通りで男性がひき逃げに遭うという事故が発生しました。被害者は近くの交番に勤務する警察官で、目撃者の証言によりますと男性は突然道路に飛び出し、交差

点に侵入してきた車両に撥ねられて死亡した模様です。詳しい事故の原因は分かっていますませんが、男性の周りには不審な人影は見当たらず、自殺の可能性も含めて捜査を進める方針です。．．．．．たった今入ったニュースです。最近頻発している連続殺人事件の容疑者と思われる人物が、事故のあった現場付近で逮捕された模様です。犯人は若い男性で、警察の調べに対し「この眼で死神を見た。今度狙われるのは自分だ。」と話している模様です。詳しい情報が入り次第またお伝えします。以上、現場からお伝えしました。』

椅子取りゲーム

さあ、ゲームを始めよう。用意はいいかな？

飲んだくれのジェリーに酒を振舞ってくれるような店は、この界限にはもう一軒も存在しなかった。

「おとといきやがれ、この文無し！てめえにくれてやるような酒はこの店には一滴もねえんだよ。」

勝手口から蹴り飛ばされて、路地裏のゴミ捨て場に放り出されたジェリーの頭上から、嘲りの言葉が降り注ぐ。負けずにジェリーも言い返してやった。

「けっ、しけてやがるな。俺が大富豪になつてから後悔したつて、知らねえからな！」

負け犬の遠吠え程虚しいものはない。

「オッサン、そんな夢みたいな事を言っている暇があったらまともな働くんだな。１ドル札一枚も持ってねえくせして偉そうな事言うんじゃないよ。お前より、そこらにいる乞食の方がよっぽど大富豪だぜ。」

店に雇われた用心棒はそう罵ると、しつこく纏わりつく野良犬を追い払いでもするかのように足蹴を食らわせ、そのまま姿を消してしまった。これにはさすがのジェリーも、しばらくの間は呻き声一つあげられず、おとなしくしているしかなかった。やがて、ゴミ捨て場に特有のすえた臭いに顔をしかめながら一言、こう口にするのが彼なりの精一杯の抵抗だった。

「……くそつたれっ！」

ゴミが目一杯に詰め込まれているビニール袋に囲まれて見上げる夜空には、見事な満月が浮かんでいた。店の用心棒に指摘されるまでもなく、ポケットの中には１ドル札どころか、１セント硬貨すら

入っていない。それどころか、差し入れた指先はポケットを突き抜けて、地面に落ちている物に触れる有様だった。

「うえ、誰だよ、こんな所にガムなんか捨てやがって。」

指先に感じた粘着質の不快感は、地面に擦り付けた程度では拭えそうにもなかった。いずれにしても、このままビニール・クッションに囲まれて夜を明かすつもりはない。この素晴らしくも不快なベッドに別れを告げると、痛む体を引き摺りながら、自分のねぐらへと帰るのだった。

夜の繁華街は、昼間の景色とは一変して電飾のネオンに満ち溢れていた。随分と羽振りの良さそうな中年男、柄の悪そうな若者、胡散臭そうな外国人、薄暗い建物の影で客引きをしている女達。路上で物乞いをしている乞食も何人かいた。性別や容姿、地位や名譽が異なっている、所詮はこの界限に蠢く輩でしかない。それなのに、今日は自分だけとんだ災難に合わされたものだ。

「まったくついてないぜ。あいつらと俺のどこが違うっていうんだ。」

誰に向かって口にした訳でもないこの台詞に、思いもかけぬ返事があった。

「ええ、そうですね。あなたは今まで運に恵まれていなかった。」

「そうなのさ。俺にもチャンスがあれば、こんな惨めな生活とはおさらば出来るんだが……。」

「あなたにも十分チャンスが御座いますよ！それも、人生を劇的に変えてしまうほどの。」

ジェリーは足を止めて、辺りを窺った。彼の横にはいつの間にか、この界限におよそ不釣合いと思える老人が立っていた。黒のタキシード姿に身を包んだその姿は、まるでどこかの富豪の執事と言ったところか。

「おい、爺さん。今日の俺は機嫌が悪いんだ。怪我しないうちに、

さつさとてめえの主人の元に帰るんだな。」

「先ほどから観察させていたいただいておりましたが、あなたこそ、まさに私どもが捜し求めていた方なのです。よろしければ、我々に同行して頂き、ゲームに参加してもらえませんか？」

「ゲームだと？余計な面倒ごとは御免だぜ。」

「そういった心配は御無用です。その方に生まれ付き備わっている“運”だけが、このゲームの勝敗を左右するのです。なお、ゲームの勝者は大富豪になれる権利が与えられます。」

「大富豪になる権利？そんな上手い話、何か裏があるんだろう？」

「もちろん、ゲームの敗者には過酷な運命が待ち受けておりますが、
・今の生活から抜け出せる事を思えば、悪い話ではないと思いがすがね。」

老人は薄気味悪い笑みを浮かべるのだった。

「そんな怪しげな話に首を突っ込むほど、俺は馬鹿じゃない。他を当たってくれないか。」

ジェリーは老人を無視してその場を立ち去ろうとした。

「そうですね。しかし、残念ながらあなたに選択する権利はありません。我々と一緒に来てもらいますよ。」

そう言うと、老人はジェリーの後頭部に強烈な一撃をお見舞いした。薄れゆく意識の中で、最後にジェリーが感じたのは、自分の口の中に広がる鉄の嫌な味だった。

ジェリーが意識を取り戻した時、自分が頑丈な仮面を被せられて椅子に座らされている事に気がついた。同じように仮面を被せられて椅子に座らされている人の姿が、仮面に開けられた二つある覗き穴を通して目に入った。顔が仮面で覆われているため性別までは不明だったが、簡素な白い病院服に似た衣服を身に着けていた。

先ほど殴られた後頭部がズキズキと痛む。思わず手で触れようと思ったジェリーだったが、両手はしっかりと金具で椅子に固定され

ていた。両手だけでなく、彼の両足も同様だった。

「何だ、これは！おい、一体これから何を始めるつもりだ！」

「おや、どうやら気がついたようですね。どうぞ、そのままお静かに！」

仮面に備え付けられたスピーカーから、聞き覚えのある声が響いてきた。それは、ジェリーが街で出会った奇妙な老人の声だった。

「皆様、大変お待たせしました。それでは、これからゲームを始めます。」

「おい、ちよつと待て！誰がゲームに参加するなんて……ウツ！」

ジェリーが口を挟もうとすると、仮面が一瞬きつく締まった。

「どうぞお静かに願います。ゲームの進行を妨げるような行為には、嚴重なペナルティが与えられますからね。なお、ゲームが終わるまではその仮面は外れません。この部屋から無事に出たいのであれば、ゲームを続けてください。」

それだけ言うと、スピーカーからは何の物音も聞こえなくなった。それはまるで、ジェリーの他にもゲームの進行を妨げる者がいないかどうか、確認しているようでもあった。

しばらくの沈黙の後、再びスピーカーから老人の声が聞こえてきた。

「どうやらご理解して頂けたようですね。さて、ゲームの説明に入る前に、皆様が置かれている現在の状況について御説明いたします。この部屋の中には性別、年齢、国籍、職業……それら全てがまったく異なる12名が集められており、ちよつと円形になる位置に座って頂いております。」

今から皆様に行っていたゲームは、“椅子取りゲーム”です。一定時間流れる音楽に併せて時計方向に回って頂き、音楽が途切れた時点で近くにある椅子に座ってもらう単純なものです。このゲームでは椅子の数が減らされる事はありませんので、限られた椅子を巡って争うような野蛮な事はいたしません。どうぞご安心下さい。

なお、椅子にはそれぞれ最初に座られていた方の“社会的地位”を記されたボードが用意されており、そのボードについては、席に座った時点で確認してもらって構いませんが、他の方には決してお見せしないようお願いします。その中に一つだけ『大富豪』と記されたボードがあり、その椅子に座る事がこのゲームの目的です。

公平を期するため音楽が途切れる都度、ゲームを継続するかどうかの意思確認を行います。ポイントは一人当たり5点とし、1点単位で掛けられるものとします。ポイントによる多数決でゲームの継続を決定する訳です。ゲームの継続が決定された場合、その時点で『大富豪』の椅子に座られていても、それは無効となります。多数決によりゲームの中止が決定されるか、音楽が一曲分終わった場合についてのみゲームを終了いたします。その時点で『大富豪』の椅子に座られていた方が、このゲームの勝者となるのです。」

そこまで言い終わると、今まで両手・両足を固定していた金具が外れた。

「それではゲーム・スタート！」

老人の掛け声を合図に、スピーカーからは『オクラホマミキサー』が流れてきた。ジェリーは始めのうち、馬鹿馬鹿しくてやる気がしなかったのだが、仮面がギリギリと締め付けられてくるので、しぶしぶ時計回りに歩き始めるしかなかった。他の参加者もきつと同じ目に合わされているに違いない。

やがて音楽が止み、銘銘が手近にある椅子に腰掛けた。ジェリーも手近にあった椅子へと腰を下ろす。

「さて、皆様。それぞれの椅子に備えられたボードを確認して下さい。ただし、その内容を他の方に見せるのだけは禁止です。良いですね。」

ジェリーもさっそく、自分の椅子に備えられたボードを確認した。そこには『弁護士』と書かれていた。

「さて、それではゲーム継続の意思確認を行います。皆様が座られ

ている椅子の手摺には、それぞれ1〜5までの数字を書かれたボタンがあります。数字は今回賭けられるポイントに対応しておりますので、ゲームの中止を希望される方は右側のボタンを、ゲームの継続を希望される方は左側のボタンを押してください。」

ジェリーは取りあえず、右側の2のボタンを押した。こんな得体の知れないゲームは早く終わらせてしまいたかつたし、ボードに記載されていたのが『弁護士』であったので、このままゲームが終了しても自分に危害が及ぶ事はないと考えたからだつた。

しばしの沈黙の後、スピーカーから老人の声が聞こえてきた。

「多数決の結果、ゲームは継続となりました。まだまだ全員にチャンスがありますよ。それでは、ミュージック・スタート」

「くそつたれ！一体、どこの馬鹿なんだ。こんな訳の分からないゲームを続けようなんて・・・ウツ！」

老人の掛け声を合図に、再びスピーカーからは『オクラホマミキサー』が流れてきた。仮面の締め付けは回数を重ねることにきつくなっているような気がする。誰が一体、こんな馬鹿げたゲームを考えついたのだろうか・・・。

音楽が途切れ、次の椅子に腰を下ろした。今度のボードには『死刑囚』と書かれていた。

「それでは再び、ゲーム継続の意思確認を行います。やり方は先ほど同じです。当然の事ながら、残ポイントに合ったボタンのみ使用可能です。その他のボタンを押された場合は無効となります。よろしいですね。」

今回のボードに『死刑囚』と書かれているのが気になったジェリーは、試しに左側の5のボタンを押してみた。しかし、何の反応もなさそうだった。そこで、左側の2のボタンを押してみた。

「おやおや、またしてもゲームは継続となりました。現在『大富豪』の椅子に座っている方は非常に残念でした。しかし、時間はまだまだ残っております。引き続きゲームを行うことにいたしましょう。それでは、ミュージック・スタート！！」

椅子が変わるたびに、ボードに書かれている内容は変わっていった。一度は『浮浪者』と書かれたボードに当たった事もあったが、その場所こそまさに、自分が最初に座っていた椅子だったのだろう。こうしてゲームは続けられ、この馬鹿げたゲームも『オクラホマミキサー』の曲の終了と共に終わりを迎えた。

「さて皆様。楽しかったゲームもついに終わりを迎えてしまいました。それぞれの椅子に備えられたボードを確認して下さい。今回に限り、ボードの内容を他の方にも見えるように持ってください。よろしいですか？」

ジェリーのボードには『執事』と書かれており、残念ながら『大富豪』ではなかった。幸運にも『大富豪』のボードを引いた者は彼の右隣にいた。周りを見渡すとそれぞれ、『弁護士』『死刑囚』『浮浪者』『詐欺師』『神父』『娼婦』『警察官』『泥棒』『政治家』『奴隷』と書かれたボードがあった。

「個人情報をデータで管理している現代社会において、その人の履歴や社会的地位などというものは、幾らでも改竄する事が可能なのですよ。それなのに、人々はそれを“まったく完全に絶対なモノである”と信じて過ごしております。これほど不完全で、あやふやな存在など無いというのに！そういったものは所詮、他者との相対的關係において成立するだけの存在ですので、昨日までは優良な市民であった者も、警察の犯罪履歴が書き換えられれば、一夜にして『死刑囚』でも『泥棒』でも『詐欺師』にでもなりえるのです。逆もまたしかり。どんな貧乏人でも、その手に大金を掴む機会があれば一夜にして『大富豪』ですよ。まったく、面白いじゃないですか！さて、ゲームはこれで終了です。幸運を手に入れられた方も、そうでない方も、残りの人生をどうか有意義にお過ごし下さい。この部屋を一步出た時から、あなた方の人生はボードに書かれた社会的地位によって動き始めます。信用するかしないかは勝手ですが、我々の力を甘く見ないほうが良いですよ。それでは、またお会いする機会がありましたらその時までお別れです！」

老人の言葉が終わると同時に、顔を覆っていた仮面が二つに割れた。ある者は狂喜し、ある者は絶望に打ちひしがれている光景がジェリーの目の前で繰り広げられていたが、そんな事にはお構い無しに、彼はこの部屋を後にしたのだった。

夜の繁華街は、昼間の景色とは一変して電飾のネオンに満ち溢れていた。

「まったくついてないぜ。あいつらと俺のどこが違うっていうんだ。

」
誰に向かってともなく口にした台詞に、思いもよらぬ答えが返ってきた。

「あなたにも十分チャンスが御座いますよ！それも、人生を劇的に変えてしまっほどの。」

「おっさん。あんた誰だい？」

「申し遅れました。私の名前はジェリー。よろしければ、我々に同行して頂き、あるゲームに参加してもらえませんか？」

プリザーブドフラワーをあなたに

私の家の近くにあるT駅周辺は、江戸時代から街道が整備されていた場所で、その影響もあって今でも道路沿いに多くの商店が軒を連ねている。それらが集まって幾つもの商店街が形成されており、随分と賑やかな様相を呈していた。商店街には買物客のためにアーケードが整備されており、冬場になると雪の多いこの地方にあって、も安心して買物が出来るように配慮されていた。

私は通勤に電車を利用していたので、自宅から駅までの距離を毎日歩いてきた。時間にしておよそ15分程度の僅かな時間だったが、季節によって移ろい変わり行くそれらの店々を眺めるのが、帰宅する時の密かな楽しみでもあった。

昔と違って自動車での買物が一般的になった現在では、近くに駐車場のない商店街にわざわざ足を運ぶ客は減ってしまった。追い討ちをかけるように、郊外に大型スーパーが建設され、豊富な品揃えと価格の安さで僅かに残った顧客でさえも奪ってしまったのだった。そんな訳で、目に見えてはつきりと分かる程ではなかったが、一軒また一軒と閉店する店が目につくようになり、今ではT駅周辺の一部の範囲だけが昔日の賑わいを僅かに留めている有様だった。

しかし、悲観する事ばかりでもない。何故なら、閉店する店がある一方で、新たに開店する店が存在するからだ。若くて気鋭に富んだ経営者達は、この街にも大勢いた。彼らこそ、この街に新たな息吹を吹き込んでくれる貴重な存在だった。

その日、私は気分を変えていつもとは違う道を歩いて帰っていた。そんな私の目に、見慣れぬ新しい店が目に入ってきた。そこは昔、雑貨屋を経営していたのだが、閉店してからというもの随分と長い間空き店舗となっていた場所だった。

そこに新しく出来たのは花屋だった。花を愛するような趣味もな

ければ、それを贈る相手もない三十寡夫の私にとって、まったくと言っていいほど縁のない店ではあったが、隣接する他の店とは一線を画すこの新たな店の誕生に、何か嬉しい気持ちを抱いたのだった。

「へえ、こんな所に花屋なんて出来たのか。」

新しいお店というのは、何となく興味を惹かれるものだ。それがまったく自分に縁がないような店であっても。

「良かったら、中に入って御覧になって下さいね。」

店の中からまだ高校生くらいと思しき女の子が姿を現した。買物を終えて店から出てきたところのようにも見えたのだが、私に声を掛けてくるくらいだからきっと、この店で働いているアルバイトなのだろう。

「いや、その……。花の事は良く分からないですし、新しいお店が出来たので、ただ何となく眺めていただけです。」

私は途惑ってしまい、そんな必要もないのに彼女に向かって言い訳してみた事を口にするのだった。

「別にいいじゃないですか。店長、お客さんですよ！」

女の子が店の中に向かって声を掛けると、それに応じるかのようにカウンターにいた男性が私の方に微笑んでくれた。見たところは私と同じくらいか、少し若いくらいだろう。

「いらっしやいませ。どうぞごゆっくり御覧になってください。」

「別に心配しなくても、このお店は“何か買ってください”なんて強要したりしませんから！ねっ、店長。」

「また、そんな事言っつて。今月の売上げが少なかったら、美紀ちゃんバイト代が払えないかもしれないよ？」

「そんな〜！おじさん、憐れな女子高生を助けると思っつて、何か買っつて行っつてくださいね。じゃあ店長、私はこれで帰りますから！」

美紀と呼ばれた女の子は、店の前に置いてあつた自転車に乗ると、こちらに手を振りながら帰っつていった。

これが私にとって人生初の花屋体験だつたのではないだろうか。

私自身、明らかに場違いな世界に踏み込んでしまったと思っていたが、店長はそんな事などお構いなしといった様子で私に話しかけてくれた。

「男で花屋の店長をしていますから、随分と珍しく思われたでしょうね。」

「いえ、そんな事はありませんよ。今まで花屋に足を運ぶ機会がなかったものですから、その何だか場違いな気がして……。」

「昔から自分の店を持つのが夢だったんです。それがまさか、花屋の店長になるとは自分でも想像していませんでしたですけどね。まあ、形はどうあれ望みが叶った訳ですから、満足しています。」

「実に羨ましいお話です。色々大変だと思えますが、遣り甲斐も大きいのでしょうか？」

これまでの私は、“花屋”という存在に一種近寄りがたい印象を抱いていた。そういつた場所に立ち入るには、何かしらの目的

例えば、誰かにプレゼントを渡す事になって、それを買うに行くような。そういつた用事があった始めて立ち入る場所だと思っていたからだ。だからこうして、何の目的もないのに花屋にいる自分が、随分と不思議に思えてならなかった。

しかしその一方で、そんな私を何の抵抗もなく迎え入れてくれたこの店の雰囲気、私は何かしら魅せられるものがあった。それは次第に自信へと変わっていき、自分でも驚くほど饒舌になっていた。「あの、不躰な質問かもしれないのですが、やっぱり以前からお花には興味があったのですか？」

「実を言うと、以前は花になんてまったく興味がなかったんです。」

「それがまた、どうして花屋になろうと決めたんんです？」

「私の妻が大変に花好きでしてね。惚れた弱みといいますが、何とかあいつの気を引こうと必死に勉強したのです。それがキツカケみたいなものですかね……おっと、噂をすれば。」

店の扉が開く音がして、若くて綺麗な女性が入ってきた。

「いらっしやいませ。」

その女性は、優しい微笑と共に、私に挨拶をしてくれた。店長が必死に気を引こうと努力したのも頷けるというものだ。私は一人納得した様子で、店内に飾られている花々を見て回り始めた。

店内には実に様々な花が飾られていた。と言っても、私に分かるのはチューリップくらいのもので、ひたすら名前の書かれたプレートを眺めてばかりいた。

「これなら分かるぞ。スズランだ！」

芳香のある真っ白な鈴のような花が、幾つも並んで垂れ下がっているのを見て、私は独りで悦に浸っていた。

「ええ、その通りです。フランスでは5月1日はスズランの日と呼ばれていて、贈られた人は幸せになれるそうですよ。」

「確かスズランって、毒性がありましたよね。大丈夫なのでしょうか？」

そこまで言ってしまったから、私は自分の失言に気がついた。店長はさして気にした風でもなく真面目にこう答えてくれた。

「お詳しいですね。特に根や花に毒性があって、スズランを生けた水を誤飲して死亡した例もあるそうです。まあ、扱い方次第だと思いますよ。」

「いや、すみません。花屋で口にする内容ではなかったですね。私は推理小説を読むのが好きなものでつい・・・余計な事を言ってしまった。」

「別に構いませんよ。普段気がつかないだけで、身近な植物の中には毒性を持つ物は結構ありますしね。」

そう言うと、店長はチューリップを手に取りこう続けた。

「綺麗な薔薇には棘がありますし、このチューリップだって毒がある。そうでしょう？」

「そうですね・・・ところで、あそこに書かれている“プリザーブドフラワー”っていうのも、花の名前か何かですか？」

私は話題を変えようと、壁に貼ってあったポスターを指差しながらそう言った。

「ああ、あれは名前ではなくて、長時間保存する事が出来るように加工された花の事ですよ。ドライフラワーよりも自然な状態で保存できますし、枯れることがないんです。」

「へえ、そんな技術があるんですね。知りませんでした。」

「最近日本でも普及し始めているんです。一番人気なのは、やっぱり薔薇ですね。プレゼント用によく利用されています。」

「プレゼント用か・・・。」

私はその瞬間、一人の女性の姿を思い浮かべていた。それは会社の同僚で、私が密かに思いを寄せている女性だった。しかし口下手な私は、彼女に親しく話しかけた事などなく、せいぜい廊下で擦れ違う際に挨拶を交わすくらいの事しか出来なかった。まして、自分の思いを相手に伝える事など思いもよらなかつたし、プレゼントを贈るなんて・・・。

私は結局、観葉植物の鉢植えを一つ買う事に決めた。プリザーブドフラワーを買ったところで、自分の部屋に飾るような場所もないまして、独身男の部屋に薔薇の花なんて飾ってあつたら、それこそ皆の笑いにされるだけだ。観葉植物であれば、インテリア代わりにはなるだろう。

「何か分からない事や困った事があつたら、いつでも相談してくださいね。」

「ありがとうございます。それじゃあ。」

勘定を済ませた私は、観葉植物の鉢を抱えて家に帰つたのだつた。

その翌日、エレベーターを待っていた私は、思いもかけない人物に声を掛けられる事になるのだつた。

「おはようございます、毛利さん。」

「お、おはようございます、小野さん。」

それは、私が密かに思いを寄せている小野由美だつた。

「昨日、駅前にある花屋さんに行かれていませんか？」

「えっ、どうして知っているんですか？」

「やっぱり！私もあのお店には良く行くんですけど、ちょうど通りがかつた時に毛利さんに似た人を見かけたので。花屋から出てくる男の人って珍しいから、ちょっと気になっていたんです。誰かへのプレゼントですか？」

「そういうのではなくて、観葉植物です。ほら、部屋に飾ろうかなって。確か・・・『モスラ』だったか『モンスラ』とかいう名前の切れ目の入った大きな葉っぱの植物です。」

「それだったら多分、『モンステラ』だと思いますよ。そうじゃないです？」

そう言って、彼女はモンステラについて説明をしてくれた。

「きつと、そうだと思います。アハハハ・・・。『モスラ』は怪獣ですし、『モンスラ』はモンペ・スラックスの略語ですからね。」

「毛利さんでもそんな事を言っただけです。私、そんな冗談なんてまったく言わない方だと思っていましたから。」

「小野さんの方こそ、すごく詳しいですね。あんな説明だけで分かつちゃうんだから。」

「好きなんですよ、花や植物の事。あつ、いけない。そろそろ戻らなくちゃ。それでは失礼します。」

そう言つと、彼女は去っていった。

男という生き物は、実に単純に出来ているものである。それからというもの、私は暇さえあれば毎日のように仕事から帰る途中、駅前にあるあの花屋へと足を向けるようになったのだ。彼女との共通の話題が欲しかったのも一つの理由だったが、もしかしたらこの店で彼女に出会える機会があるかもしれないと思ったからだ。その機会は、案外と早くに訪れたのだが、しかしそれは、私にとってあまり良い結果を生むことにはならなかった。

その日、休日で行く当てもなかった私は、いつものように駅前にあるあの花屋に向かっていた。店を訪れた私を迎え入れてくれたのは、他ならぬ彼女だった。

「いらつしゃい・・・あれ、毛利さんじゃないですか。」

「小野さん、何で君がこの店で働いているの？」

私の声を聞きつけて、この店に私を招き入れてくれたあの女の子がやって来た。

「こんにちは。あれ、お二人ともお知り合いですか？」

「美紀ちゃん、紹介するわね。こちらは私の職場の同僚で毛利博嗣さん。毛利さん、こちらはのお店でアルバイトをしている宮部美紀さん。」

「毛利さんって言うんだ。へえ、なるほどね。そうか、そうか。」

「この年頃の女の子というのは、妙に感が鋭くて困るものだ。」

「そんな事より、さっきの話。何でこの店で働いているの？」

「働いているわけじゃなくて、ちよっとお留守番を頼まれたんです。圭一さん・・・じゃなかった、東野さんに。色々とお花の事とか相談に乗ってもらっているんです。」

「店長は今、配達に出かけていてね。私だけだと心配だからっていうんで、由美さんに連絡して来てもらった訳。どう、驚いた？」

この店に頻繁に顔を出すようになってからというもの、私とは顔馴染みになっていた宮部美紀がそう聞いてきた。

「でも、それだったら奥さんに留守番してもらったらいいじゃないか。わざわざ君が手伝わなくても・・・。」

「智子さんは今、実家に帰っておられるそうなの。何でも、お母さんが体調を崩されたとかで・・・あつ、いらつしゃいませ。」

彼女はそう言うと、別の客の対応に行ってしまった。

「花の色は移りにけりないたずらに」って言うでしょ。花の色が変わるように、女心も変わっていくものなのよ。しっかりと捕まえておかないと、取られちゃうわよ。」

そう言って、女子高生はニヤニヤした笑顔を浮かべていた。最近の高校では古典も碌に教えていないのだろうか。

「その歌はそういう意味じゃないんだよ。それに、相手は妻帯者だ」

し……。」

「そう言つて油断していると、大変な目に合うわよ。第一、“実家に帰つた”つていうのだから怪しいものだわ。」

「そんな筈はないだろう。あの夫婦は随分と仲が良さそうだった。この花屋を始めたのだから、奥さんが花を好きで……。」

「そんなの昔の話だわ。時は移ろい行くものなのよ、まさに歌の通りにね。それに、表向きだけ仲が良かったって事も考えられるんじゃない？俗に言う“仮面夫婦”つてやつ。もしかしたら奥さんが邪魔になつて……。」

「美紀ちゃん。悪いんだけど、こっちに来てちよつと手を貸してくれない？」

「はい、今行きます！じゃあ、おじさん。せいぜい頑張つてね。私も応援するから。」

そう言つと宮部美紀は店を何処かに行つてしまった。それ以上店にいて邪魔をしては悪いと思つた私は、二人に別れの挨拶を告げると店を後にしたのだった。

「圭一さん。私……。」

「由美さん。僕は本気で君の事を愛しているんだ。信じてくれ！」

「私だつてあなたの事を愛しているわ。でも、智子さんが……。」

「智子の事は心配要らない。僕の方で上手くやるよ。」

「でも、どうやって。」

「僕は花屋の店長だ。植物の中には強い毒性を持ったモノが存在するのは君も知っているよね。智子には悪いけど、僕達の幸せの為に消えてもらつしかないと思つんだ。」

「でも、彼女が急にいなくなつたりしたら、周りが不審に思つんじゃないかしら？特に、あのアルバイトの美紀つて子。彼女は妙に勘が良さそうよ。」

「智子は実家に帰らせたって事にしておけばいいよ。何だったら、美紀って子も一緒に消えてもらおうか？」

「でも、死体の処理はどうするの？うまく隠したつもりでも、死臭から事件が発覚するケースというのはよく聞く話じゃない？」

「それだったら心配は要らないよ。プリザーブドフラワーの原理を利用するのさ。僕は既に、生花だけでなく人体に応用できるレベルにまでその開発を進めたんだ。これを使えば死体が傷む事はない。適当な時期を見計らって何処かに埋めればいい。それよりも……。」

「まだ何か心配事があるの？」

「君の同僚の……何ていったかな、よくうちの店に来る男がいただろう？」

「ああ、毛利さんね。彼がどうしたの？」

「彼は推理小説を読むのが趣味らしいんだ。花に含まれる毒の知識だけでなく、プリザーブドフラワーの事についても知っている。もしかしたら彼が……。」

「彼の事なら心配いらないわ。だって彼、私に惚れているみたいなのよ。私が少しでも優しい言葉を掛けてあげれば、きっと何だって言う事を聞いてくれるわ。」

「まったく……。君って見た目とは違って、随分と酷い女だね。」

「私は、あなたの為なら悪女にでもなるわ。だから決して私を裏切らないでね。」

そう言うのと、彼女は彼に口づけをした。そこで私の夢は終

わった。まったく、酷い夢だった。きつとあの女子高生が妙な事を私に吹き込んだせいだろう。

そんな事があってから一年くらい経った頃の事だろうか。私はいつものように駅前にある花屋を訪れていた。私を迎えてくれたのは、

この店に訪れるキツカケを作ってくれたあの女の子だった。

「こんにちは、美紀ちゃん。正式にここで働く事にしたんだってね。おめでとう。」

「あっ、毛利さん。こんにちは。とりあえずはこのお店で働いてお金を貯めて、ゆくゆくは自分のお店を持つと思うているんですよ。ここはその時までの足掛りです。」

「またまた、そんな事言つて！店長に聞かれたら怒られるよ？」

「大丈夫ですよ。店長は今、留守にしていますから。奥さんの体調が良くないからって、一緒に病院に行かれています。奥さんは大丈夫だつて言っていたんですけどね。ほら、うちの店長つて奥さんにべつたりじゃないですか。心配で仕方がないんですって！それで、こうして私が一人お留守番を任されているという訳です。」

彼女は両手をかかげると、大層な溜息を吐いて自分の苦境を私に語つて聞かせてくれた。以前、彼女が私に披露してくれた夫婦険悪説は、まったくの出鱈目であり、東野圭一と智子の夫婦は、以前にも増して仲良く暮らしているようだ。智子が実家に帰っていたのも、実際に彼女の母親の具合が悪かったのが原因であったのは、後で聞いて知っていた。まったく、とんだ人騒がせな話である。

「それは大変だったね。おや、噂をすれば……。」

店の入口から、店長が姿を現した。しかし、一緒に行ったはずの彼の妻の姿はなく、彼の様子もどこかおかしかった。

「美紀ちゃん。すまないがしばらく店を閉めることになりそうだ。」

「一体、何があつたんですか。」

「……まだ詳しい事は分からないが、智子の容態が思わしくなくてね、すぐに入院する必要があるとだけ言われたんだ。私はこれからすぐ、病院に戻るよ。」

二人の会話を聞いた私は、余計なお節介かとも思ったが二人にそう言った。

「あの、私で良ければ何かお手伝いいたします。何でも言うてください。」

「毛利さん、ありがとうございます。しかし、妻も気を使うと思えますので、私だけで大丈夫です。すみません、ご心配をおかけして」

「そう言つと、店長は大急ぎで身の回りの物をカバンに詰め込むと店を出て行つた。」

「美紀ちゃん、何か分かつたら私にも教えてくれないかな。長引くようだったら、お見舞いにも行きたいし……。」

私は彼女に連絡先を告げると、店を後にした。それが、彼女を見た最後の瞬間だつた。

その後、宮部美紀からは何の連絡も掛かつてこなかつた。何度か店の前を通つてみたものの、相変わらず店は閉まつたままだつた。彼女の事だからきつと、別の店に再就職したのだろう。もしかしたら、念願叶つて何処かで自分の店を開いているのかも知れない。

小野由美はちょうど同じ頃、突然会社を辞めてしまった。地元に戻つて両親の面倒を見るのが理由だそうだ。彼女との仲はあれ以上に進展しないまま、私は他の同僚と一緒になつて彼女の退社をただ見送ることしか出来なかつた。今現在、彼女が何処に住んでいるのかも知らないし、連絡先も分からない。

東野圭一・智子夫妻は、その後どうなつたのだろうか。彼は随分と妻を愛していたから、今でも彼女の側に付き添つて看病をしていることだろ。

そして私は、今日もいつもと変わらぬ道を、会社に向かつて歩いていく。

気まぐれな女神

高校を卒業するまで実家で暮らしていた僕にとって、“一人暮らし”という言葉の、なんと甘く期待に満ちた響きを持っていた事が！親からの余計な監視から解放されるというメリットはもちろん、一日中パジャマで過ごしていたって誰にも文句を言われる心配も無いし、友達を招いて朝まで馬鹿騒ぎをしたって構わない。何だったら、彼女を部屋に招待する事だって可能なのだ。(もちろん、彼女が出来た後の話だけど・・・) いずれにしろ、時間と空間を自分の自由に出来るっていうのは間違いなかったし、どんな楽しい出来事が待ち構えているかなんて想像もつかなくて、期待に胸を膨らませていたものだ。

ところが、現実っていうのは案外地味で退屈なものなのだ。「ドラミみたいな都合の良い展開なんて期待していなかったさ！」なんて言ってしまうと、チョッピリ嘘になるけれど、それでも多少くらい、夢を見させてくれても良さそうなものだと思う。神様は意地悪だ。

<古松独身寮>それが僕、北川誠が現在住んでいる社員寮の名前だ。高校卒業後、地元企業に就職した僕が、晴れて社会人として新たなスタートを始めた場所の名前でもある。

古松独身寮は市内の中心部に建てられた三階建ての建物。風呂・トイレ・食堂は共同で、建物の中にある15部屋がそれぞれの住人に割り当てられている。もちろん社員寮だから、住人っていうのは全て同僚。部屋は全て六畳の和室。“ルームシェア”って言えばなくもないけれど、そんな洒落たものでは無いし、そもそも、“初めての一人暮らし”が寮生活だなんて・・・出来る事なら拒否したいと思っていた。

『新入社員は誰でも、最低一年はこの寮で生活する事』というの

が、会社創設以来からの暗黙の決まりだった。担当の言い分としては「共同生活を通じて先輩や同僚と交流を深める事が出来るというのは、新入社員にとって貴重な経験になるだろう」って事らしいけど、要するに会社としては住居手当を出したくないだけなのだ。まあ、自分でアパートを借りて生活出来る程に新入社員の給料は多くなかったから、そんな決まりなど設けなくても誰もが否応無しに寮に住むことになるのは確定していた。そりゃあ僕だって、最初は断固として抵抗するつもりだったから、片っ端から不動産屋をあたってみたさ！でも、結局のところ他に選択の余地はなかったんだ。そんな訳で現在、この寮には僕を含めて10名の住民が、一つ屋根の下で仲良く共同生活を送っているのだった。

ところで、古松独身寮の建物の側面には、各階へと通じている非常階段が設置してあったんだ。もともとはベージュ色のペンキを塗った鉄製の階段だったけれど、長年の風雨にさらされた結果、今では所々ペンキが剥げて赤茶の錆が浮き出していた。非常時の避難を目的に設置してある階段だから普段は使う必要はないのだけれど、“人目につかずに部屋に出入り出来る”って事でこの場所を利用している同僚は大勢いるみたいだった。もちろん、その目的というのは彼女をコッソリ部屋に招くって事で・・・実際まあ、羨ましい話だと思う。

考えてみると、あの晩もそうだったんだ。

僕はその日、翌日に控えた会議の資料を作る為に遅くまで残業をしていたんだ。始めて自分に任された仕事だったから、それこそ食事を摂る時間も惜しんで取り組んでいたから、会社を出た時には既に23時を回っていたと思う。寮までは歩いても5分とかからなかったから、今からでも帰ってシャワーを浴びて布団に潜り込みさえすれば、十分な睡眠時間は確保出来るって寸法だ。“試験の前日はゆっくり休んで明日に備える”ってというのが僕の学生の頃からの習

慣だったし、大事な会議の日に欠伸なんかするようなへまはしたくないからね。

ところが、寮の玄関まで辿り着いた時になって、鍵を職場に置き忘れてきた事に気がついた。職場まで取りに帰っても良かったんだけど、何となく億劫だった僕は、どうせ非常口が開いているだろうと思って、非常階段がある場所まで建物を回ったんだ。

僕の部屋は三階だったんだけど、途中どれか一つくらいは開いているだろうっていうんで、一階から順番に確認していったんだ。でも、今日に限って一階も二階も三階も、全ての扉に鍵がかかっていた。住人の誰かが模範的な防犯意識に目覚めてくれたのか、それとも、今日に限っては外部からの招待客がなかったって事だろうね。

今日みたいな状況でなければ、僕としても随分と有難い出来事なんだけど、この時ばかりはそんな“良識のある皆様”を殺してやりたいくらいに疎ましく思ったものさ。何にしても、僕の思惑は見事に外れてしまい、仕方無しに非常階段を下りて再び会社に戻らざるを得なくなった。皆さんも良く覚えておいて欲しい。「楽をしようと考えている者には、神様は冷たい」って事をね。

しかし、そんな僕にもまだ僅かに運が残っていたらしく、非常階段を降りきった直後、非常口の扉が開く音が聞こえてきたんだ。それはまるで福音のように僕の耳に心地よく響いたよ。それが幻聴じゃなかった証拠に、はっきりと三階の非常口が開いているのが見えた。そして、建物の中から漏れている光は、まるで僕の帰りを待ちかまえてくれていたかのように、明るく温かく輝いていた。前言撤回。「楽をしようと考えている者にも、そうでない者にも、神様は等しく平等である」ってね。

だけど、その明かりは僕のために用意されたものではなかった。舞台上でスポットライトを浴びて登場するのは、物語の主人公と決まっている。そして、こういう月明かりのテラスの上で恋人達は愛を囁き交わすものだ。

扉から姿を現したのは、若い女性だった。良く言えば随分と色っぽい格好をしており、ヒールの高い靴を履いていた。それが非常階段に触れた時に立てる足音が、妙に甲高く響いていた。随分と挑発的な雰囲気を漂わせているように見えたのも、単に月明かりのせいばかりではなかったのかもしれない。

彼女は階段の手摺の前まで来ると、煙草に火を点けた。その後を追うようにして姿を現したのは、会社の先輩で業務企画部に所属する松田崇だった。松田先輩は女子社員の間でも評判になるくらいのイケ男で、最近では秘書課に所属する水野弘美と付き合っているという噂も聞く。それが事実なら周囲も認める美男美女カップルの成立となる訳だが、本人達に直接確認したことはない。普段から寮で顔を合わす事なんて滅多になくて、もっぱら彼女の部屋に泊まり込んでいるという噂もよく耳にする。これまた真偽のほどは確認したことがないけれど。とにかく、妙な場面に出くわしてしまったものだ。こういった場合の最善の対処方法と云えば……人知れず物陰に隠れるべきだろうか？

「煙草くらい、俺の部屋で吸えば良いじゃないか。わざわざ外に出る必要はないだろ。」

「こうして夜の街を見ながら吸いたいのよ。それとも、こうして二人でいるところを誰かに見られるのは困る？」

「そんな事はないさ。ただ、周りの連中に無神経な詮索をされるのが嫌なだけだ。」

松田先輩の答えに、彼女は軽く笑っただけだった。そうやって手摺にもたれ掛りながら、松田先輩を困らせて楽しんでいるようにも見えた。僕の方かというと、しばらく隠れていれば二人に気付かれずに済むだろうと思いい、とりあえず息を潜めて成り行きを見守っていた。

「あんまり困らせても可哀想だから、部屋に戻ってあげるわ。」

しばらくして煙草を吸い終わった女性は、そういうと非常口の扉の方へと向かって歩き出した。松田先輩も安心した様子で、彼女に

従う。これで無事に終わりそうだと思った時、事態は思わぬ展開を見せた。

「ねえ、ここでキスしてよ。」

「ここですか？」

「いいじゃない、誰も見ていないわ。それとも、私とはもう飽きた？」

そんな彼女の質問を否定するように、松田先輩は彼女と重なり合った。二人はそうして抱き合って、階段の踊り場でキスを交わしていた。松田先輩の背中越しから覗く彼女の視線が、一瞬だけこちらに向けられたような気がしたが、それはきつと気のせいだろう。二人は誰に遠慮する訳でもなく・・・唯一の例外が僕なのだが・・・長く深いキスを交わすのだった。それが、僕と彼女の初めての出会いだった。

「おい北川、聞いてんのか？」

「・・・・・・・・・・はっ、はい！何ですか？西野先輩。」

僕に声を掛けてきたのは、同じ課に所属する西野健司。僕の良き先輩であり、同じ寮で生活を共にしている仲間の一人だ。

「何ですか？」じゃないだろ。お前、15時から会議だったよな。会場を確認しておかなくても大丈夫か？」

「ああ、それなら昨日のうちにやっておきましたから大丈夫です。後は会議資料を持っていくだけです。それよりもこの資料見てくださいよ。昨日、残業して作った自信作ですから！結構大変だったんですよ。」

「そうか、やっぱり聞いてなかったんだな。今日の会議の場所が急遽変更になったんだ。三階の会議室から五階の会議室に代わっているぞ。まだ時間があるから、念のため会場だけは確認しておけよ。それと、ついでに頼んで悪いんだが・・・」

その時既に部屋を飛び出していた僕の耳には、西野先輩の声は届

かなかった。

「・・・資料室から書類を持ってきてくれて頼もうかと思ったんだが、聞いちゃいねえな。」

会議室に入った僕の目の前には、一人の女性の姿があった。先ほどまで会議が行われていたようで、テーブルの上には幾つかのコーヒーカップが残されたままだった。

「すみません。すぐに片付けますので。」

彼女は僕の方を見ずにそう言うと、コーヒーカップを集め始めた。随分と大人しそうな感じの子で、あまり見覚えがない顔だった。きつと印象に残りにくいタイプなのだろう。

「えっと、何か手伝いますでしょうか？」

ただ見ているのも悪いと思った僕は、そう彼女に声を掛けた。胸元の名札から、彼女が総務部に勤める上野亜津子だと判った。

「ありがとうございます。でも、もう終わりますから大丈夫です。」

そう言われてしまつては手の出しようもなかったので、これから行われる会議の準備に取り掛かることにした。そんな時、誰かがこの会議室に入ってきた。

「亜津子、さっきの話の事なんだけど・・・。」

そう言つて部屋に入ってきたのは松田先輩だった。部屋の中にいるのが彼女一人でない事に気がついた松田先輩は、咄嗟にこう言い直した。

「亜津子ちゃん、さっきの会議の後、ここにボールペン置き忘れていなかった？あれ、俺のお気に入りなんだよね。」

「松田さん、その胸元に挿してあるの。それじゃないですか？」

彼女が事もなげにそう答えてやると、松田先輩は始めてその事に気がついたかのように大げさに答えるのだった。

「ああ、そうだった。うっかりしていたよ。ありがとう。あのさ・・・。」

「松田さん。悪いんですが、急ぐ用件でなければ後にしてもらえませんか？」

「そうか。邪魔して悪かった。」

そう言っていると、松田先輩は部屋を後にした。幾ら鈍感な僕だったさっきの会話だけで、二人が特別な関係だって事くらい分かる。

「あのさ・・・松田先輩と上野さんって、やっぱりその・・・。」

「付き合っているのか？」って事ですか。私が松田さんの彼女だったら、意外です？」

「いや、そういう訳じゃないんだけど、松田先輩って秘書課の水野さんと付き合っているって噂を聞いた事があるし、もしそれが本当なら二股かけている事になるでしょう。そういうのはやっぱり良くないと思うんだ。」

その言葉に、亜津子は怒るところか、真面目な顔でこう言ったのだった。

「代わりに北川さんが彼氏になって、私を幸せにしてくれる？」

突然の事に、僕は何て答えて良いのか分からなかった。そんな僕の様子を見て、彼女は笑ってこう言った。

「冗談よ、冗談。もしかして本気にしたの？」

そして、机の上のコーヒークップを抱えて部屋を出る間際、振り返ってこう付け加えた。

「でも、階段の下から他人がキスしているのを隠れて覗き見るなんて、趣味が悪いわよ。このスケベ！」

そう言われて始めて、昨日見た女性が彼女である事に、僕は気付かされたのだった。

「私を振り向かせるくらいのイイ男になったら、相手してあげるわ。」

僕はまったく彼女に翻弄されたまま、一人部屋に取り残されていた。

この時まで、僕の物語は始まったばかりだった。これから起こる物語の中で、僕が演じる役柄が脇役なのか主役なのか、それは神様だけがご存知の事だろう。ドラマみたいな都合の良い展開なんて期待は出来ないかもしれないけど、それでも少しくらい、夢を見させてくれるも良さそうなものだと思う。「誰にだって、神様は等しく平等である」ってね。

真夜中の公園

真夜中の公園には決して近づいてはいけないよ。

夜空に真つ赤な満月が輝いているような場合は特にいけない。そんな夜には決まって、いつもとは違う出来事が起こるのだから。嘘じゃない、本当の事さ。

コンクリートで出来た蒸気機関車が公園にあるのは見たことがあるよね。そうそう、土管を組み合わせた単純な代物だけれども、煙突や汽笛はもちろん、運転席や客室もちゃんとあって車輪もついているヤツさ。それが汽笛を鳴らすのが始まりの合図。もしも夜中に公園の近くを歩いている時にそんな音が聞こえてきたら、決して後ろを振り向かずに急いで通り過ぎる事！ぐずぐずしてはいけないよ、怖い目に遭いたくなかったら。ほら、聞こえるだろう？ちようどあんな感じさ。

やがて、二つ並んだブランコが振り子のリズムでスウィングしだす。最初は小さく、だんだんと大きく。キーコ、キーコ、キーコ。それに併せて、シーソーがパークカッションのリズムを刻むのさ。キーコ、キーコ、バツタン。キーコ、キーコ、バツタン。

そうするとほら、昼間はジツと動かないカバやライオンの像が、一つ身震いをしたと思う間もなく、まず目を覚まし始めるだろう。それらに遅れるようにして、今度は普段スプリングに固定されているウサギやリスの乗り物が、その鉄の縛めから解き放たれて軽やかに跳ね飛び回り始めるのさ。もうそうになったら抑えようがない。どこからともなく小さいのやら、大きいのやら、スバシッコイのやら、ノロマなのやら、そういつた普段は隠れて見えない連中が、徐々に徐々に姿を現すんだ。大抵は動物の形をしているんだけど、よくよく注意して見てみると、人の形をした影がその中に混じっているから気をつけないといけないよ。そいつらの正体は、地面に吸い込ま

れて消えてしまった影法師なんだけれど、手近にいる生き物を取り込んで実体化する性質を持っているから。でも、心配は要らない。狙われるのは自分自身の実在性を疑っているような奴、自分を見失ってしまったような奴、そんな心の弱い奴らばかりだから。君はきつとそんな弱くないよね？

ところで、公園の中央にコンクリートの山があったのを覚えているかい？イボイボに覆われたコンクリートの山。反対側にはすべり台がくつついているアレさ。その天辺にある、柵で囲まれた四角いスペースがすべり台のスタートなんだけど、そこからは公園の全てが一望出来るようになってる。まさに特等席なんだ。誰もが一度はそこに登ってみたくなる、そういう場所さ。

だから、真夜中の公園で目覚めた集団は、大きいのも小さいのもみんな揃ってコンクリートの山の麓に集合するんだ。“誰が真っ先に、その特等席に辿り着けるのか”ってね。だって、そこに最初に辿り着いたヤツが、その日のリーダーになれるっていうのが夜の公園の決まりだったんだから。

でもね、いつも決まって一番にそこへ辿り着くのは、一匹の猫なんだ。黒天鵝絨くろてんじゆのしなやかな肢体に、二粒の紫水晶の瞳を宿して、研ぎ澄まされた銀色の髭を生やしている猫さ。その姿はまさに、夜の女王と呼ぶに相応しい貫禄を備えているよ。そこらにいる野良猫の類なんかじゃ決してない。きつとそうだよ。間違いないさ。

そして彼女は、いつでも悠々たる足取りでその席へと辿り着いてしまうんだ。他の連中があれほど必死にその席を目指しているっていうのに、そんな事なんてまるでお構いなしといった様子でね。生まれ付いての軽やかな身のこなしで、ヒョイヒョイと登っていくのさ。時には誰かの頭を踏んづけて、時にはイボイボに足をかけて、でも何時だって、結局は彼女が最初に天辺に辿り着く。まるで始めからそうと決まっているかのよう。

すつくと立ち上がった彼女は、自分がリーダーだって事を周りに

集まった連中に告げるように、長く尾を引く鳴き声を上げるんだ。最初は低く唸るように。そして徐々に高く響き渡るように。そうならもつたらもう、他の奴らは彼女の足元に跪いて傳うだけさ。カバモライオンもウサギモリスも、他の連中も。例の影法師だってそうだ。

みんなは彼女に目を留めてもらいたくて、何か彼女に渡す為の贈り物を探しに出かけなくちゃなくなる。それは、砂場に置き忘れたバケツとスコップだったり、誰かが失くしたりリボンの付いた靴の片一方だったり、少しでもだけ飲み残しがある炭酸飲料の空き缶だったり、虫に食われた落葉だったり。そういった贈り物をそれぞれが持ち寄って砂場に並べ終わると、その周りで円を描くようにグルグル、グルグル踊り始めるのさ。その頃には、公園全体が独特の熱気に包まれていて、いつもだったらあんなにカチンカチンの鉄棒やジャングルジムが飴みたいにグニャグニャと波打ち始めて、浮き上がった滴が冬の軒先にぶら下がっている氷柱みたいに垂れ下がりがだすんだ。その光景はまるで、そこに不思議な果実が実ったみたいに見えるだろうよ。そんな出来事が、夜明けを告げる一番鶏が鳴くまで続けられるのさ。

ところがある日、その公園でかくれんぼをしていた男の子がいたんだ。その子は蒸気機関車の中に隠れる事に決めた。何と言っても自分の身体をすっぽり隠してくれるこの場所がお気に入りだったからね、そこ以外に隠れる場所なんて他にないと考えたのさ。中は小さいトンネルみたいになっていてね、丸く切り取られて見える向こう側は、普段見慣れた景色と同じんだけど、まったく別の景色みたいに見えるのさ。それはまるで、万華鏡でも覗いているみたいだね。

コンクリートのひんやりした触感を背中に感じながら、男の子は友達が捜しに来るのを今か今かと待っていたんだ。ところが、中々誰も捜しには現れない。とうとう待ちきれなくなってしまって、知

らない間に眠ってしまっていたんだね。そんな事なんて誰も気付かなかったらか、やがて日が暮れてしまうと、みんな家に帰ってしまったんだ。男の子を独り、公園に残したままでね。

男の子が目覚めたのは、蒸気機関車が例の汽笛を鳴らした時だった。もちろん、辺りはとつくに暗くなっていて、運転席の窓から覗いて見ると、普段は姿を隠している見たことのない連中が大勢いるのが目に入ってきたんだ。幸い、コンクリートの山と蒸気機関車とは少しだけ場所が離れていたから、男の子が見つかる心配はなかったけれど、蒸気機関車の中から出る事は出来なかったんだ。そんな事をしようものなら、すぐにあいつらに見つかってしまっからね。

その日のリーダーもまた、黒猫だった。やがてみんなが贈り物を探すために公園をうろつき始めると、蒸気機関車の周りにも幾つかの影が忍び寄ってきた。もう駄目だ、このままだと見つかってしまっってその子が思ったまさにその時、コンクリートの壁に文字が浮かび上がったんだ。暗闇の中でもハッキリと読めるような、緑色の蛍光色でね。

『シツコクニ、オキサリシ、ギンノニンギョウ、フレシモノニハ、カミノイカズチ（漆黒に置き去りし銀の人形触れし者には神の雷）』

男の子はただもう訳も分からずに、その文字を読んでみた。すると、身体の周りがぼんやりと銀色に光り始めた。それは何度も何度も口に出せば出すほど、どんどんと強くなってきて、終いには蒸気機関車の中を明るく照らすくらいに輝き始めたんだ。

しばらくして、最初はリスが覗きにやって来た。けれども、男の子には近寄りもせずに通り返ってしまった。カバもライオンも覗きに来たけど、みんな気が付かない振りをして通り返してしまっつか、しきりに蒸気機関車の周りをうろついていた。ライオンだけは一度だけ蒸気機関車の中に腕を差し込んできたけど、あと少しのところ

で男の子の身体には届かなかった。そして最後に、例の影法師がやって来た。あいつらの体は自由自在に伸び縮みできるから、その真っ黒な手が男の子の身体に触れるくらい近くまで伸びてきた。奴らは随分と執拗にそうやって手を伸ばしてきたけれど、結局は諦めて何処かに行ってしまったようだった。

みんな諦めて何処かに姿を消してしまい、男の子がほつと安心していると、足元から変な声が聞こえてきた。それは本当に注意していないと聞き逃してしまうような小さな声だったから、最初は単なる空耳かと思っていたんだ。周りには音を発するようなモノは何もなかったからね。けれども、よくよく目を凝らしてみると、足元に転がっていた人形から声がするようだった。

男の子が自分に気が付いた事を確認した人形は、ピョンツと飛び上がった。そして、男の子について来いと言わんばかりに手を振って、蒸気機関車の出口へと向かっていた。きちんと男の子が自分の後についてきているのか、何度も確認するためにこちらを振り向き、その度にしきりに手招きするのだった。蒸気機関車の中は狭くはなかったけど、随分と長い間隠れているには窮屈な場所だったから、男の子はその人形の後に従って出口へと向かっていったんだ。

蒸気機関車から抜け出すと、その周りには見慣れない動物と影法師がたくさん集まっていた。そして、コンクリートの山の天辺には黒猫が一匹いて、紫水晶の瞳でジツと男の子の様子を伺っていた。気が付くと、人形は一人で勝手に歩き始めていた。人形が歩いた後は、男の子が通れるくらい道が開けていたけれど、時間が経つにつれて徐々に閉ざされていくようなので、男の子はぐずぐずせずに人形の後を追いかける事にした。そうしてしばらく歩いていると人形が立ち止まって再び男の子の方を振り返り、銀色に輝いているグローブジャングルの方を指差し始めた。

“グローブジャングル”が何かって？ “回旋塔”の事だよ。ほら、“回転ジャングル”とか“ぐるぐる回し”とか呼ばれている地球儀

の格好をしたあの遊具の事さ。

それまで気が付かなかったけど、男の子の周りを覆っていた銀色の光は、最初に比べて随分と弱くなっていったんだ。先ほどまでは男の子の側に近寄りもしなかった周りの動物や影法師も、徐々にではあつたけど距離を縮めてきているような気がしていた。

そうこうするうちに、人形はピョンつとグローブジャングルに飛び乗ると、男の子に向かって手招きした。周りには不気味な連中はかりがウヨウヨいるだろう？男の子は仕方なくグローブジャングルに飛び乗ったんだ。ちょうどその瞬間、男の子の周りを覆っていた銀色の光が消えてしまい、人形の姿も見えなくなってしまうたんだ。すると、黒猫が一鳴きするのを合図に、今まで遠巻きに見ていた連中が急にグローブジャングルの周りに群がり始めたんだ。そして一斉にガタガタとそれを揺すり始めた。どうやら中に入る事は出来ないみたいだけど、そうやって男の子を引き摺りだそうとしているようだった。男の子は必死にさつき蒸気機関車の中で見た言葉を思い出そうとしたけれど、なんて書いてあったのか思い出せなかった。仕方なく、グローブジャングルの中心で小さく震えている事しか出来なかった。

そうしているうちに、黒猫がもう一鳴きした。今度はそれを合図にして、連中はグローブジャングルを回転させ始めた。目を回した男の子が、諦めてグローブジャングルの中から姿を現すだろうって考えたんだらうね。グローブジャングルはもの凄いスピードで回り始めて、男の子は気を失いそうになっていた。周りの景色は凄くスピードで回転していたし、夜空に輝く星だって、目に見えるくらい素早く動いているようだった。

どれくらい時間が経ったんだらう。男の子が気付いた時には、既に夜は明けていた。周りにはあの奇妙な連中は一人もいなくて、公園も普段と変わらない様子だった。そして、全てが終わってグローブジャングルから地面に降りた男の子は、ようやく家に帰る事が出来たんだ。話はそれでおしまいさ。

何故そんな事を知っているのかって？それはね、僕がその一部始終をこの目で見たからなんだ。嘘じゃない。そうそう、蒸気機関車の中には『しきりにしつこく、ウサギのみ近づかん。世の不思議にはレモンのニオイ』って訳の分からないイタズラ書きしか残ってなかったよ。そうだ、レモンガム食べるかい？

五月雨物語

上の段

むかし、一人の男がいた。

男には妻がおり、一人娘を授かっていた。

秋の候、各地で疫病が猛威を振るい、看病のかいなく妻がこの世を去った。

男は酷く悲しみ、しばらくは後添いを貰う事もなかった。

ある日、男の元に一人の女が宿を借りに来た。

見目麗しいその容貌は、下賤の身とは思えなかった。

男が仔細を尋ねても女は固く口を閉じ、身の上を話さずにいた。

やむなく男は女の好きに任せると、女はそのまま家に住み着いてしまった。

季節が一つ巡る間もなく、女は赤子を身籠った。

背に特徴的な痣があったが、それを除けば玉のような男の子だった。

未だ娘は女に懐かず、女を母とは呼ばなかった。

女はそれを疎ましく思い、娘を捨てるよう男に示唆した。

男は娘を不憫に思い、女の手の届かぬ所へと連れ出した。

幼き娘は男に手を引かれ、夜に紛れて村を出た。

途中、熊笹がザワザワと鳴り響くのを耳にした。

行くな、行くな、その子を大事に思うなら。

男はただの風の音だと娘に告げて、先を急ぐ事にした。

やがて、俄かに暗雲が立ち込めて、大雨と落雷に襲われた。

男は荒れた蔵を見つけると、嫌がる娘を中に押し込んだ。

入るな、入るな、この蔵には鬼が住む。

男はただの雨の音だと娘に告げ、蔵の扉に鍵を掛けた。

夜が明けるまでの辛抱だ。しばらくの間、ここで待て。

男が告げる言葉も虚しく、娘は落雷と共に消えていた。

そんな事とは露知らず、男は急ぎ姿を晦ました。家へと戻った男の前に、女の姿は既になかった。女は何処かへと姿を晦ましており、子の行方も知れなかった。自らの過ちに気付いた男であったが、既に蔵の中に娘の姿はなく失ったものの価値の重さに、ただ慙愧の涙を流すだけだった。

白玉か何ぞと惑い閉じ込めし露と知りせば消えざらましを

（貴重な真珠か何かと勘違いして、誰にも手出し出来ぬよう蔵に閉じ込めてしまった。

夜露と知っていたらそんな事はしなかったし、朝までは消える事もなかっただろうに。）

この辺り一体には盗賊団が出没しており、その蔵は盗品の隠し場所だった。

他人が近づくのを恐れた盗賊団は、蔵に鬼が住むと噂を流していた。幼い娘は結局、盗賊団に連れ去られたのだが、男は鬼に食われたと思っただようだ。

まだ随分と世の中が荒れていた頃の話である。

下の段

むかし、一人の男がいた。

男は幼い頃に両親と生き別れ、天涯孤独の身の上だった。

ある時、男は街で見目麗しい若い女と知り合った。

女は一人住まいの身であり、男は請われるままにその屋敷へと足を運んだ。

夜が更ける頃、女の方から誘いをかけてくるので、男はそこで一夜

を共にした。

それから度々、男はその屋敷を訪れるようになった。

女は嫌な顔一つするでもなく男の世話を焼き、男はそれを素直に受け入れた。

こうしてしばらく経つうちに、女の方からこう申し出てきた。

身を尽くせども、心変わりは世の常。思いを寄せぬ女など、その身には不自由でしょう。

男はそれにこう答えるだけだった。

何の不自由がありません。ましてやこれほどのご恩。いかようにして返すべきか。

それを聞いて女はこう答えた。

なれば今より先、生きるも死ぬもその命、私の意のままに願います。男は元より否と口にする事はなく、女の意に沿う事を固く誓った。

男の誓いを聞いた女は、普段は使っていない離れの家に男を招いた。そして男の着物を剥いで背中を出させた。男の背には特徴的な痣があった。

女は何処かへと姿を消したかと思うと、男装して鞭を手に姿を現した。

そして、その手にした鞭で、男を強かに打ち据えた。

いかがでございますか。これ程の責め苦に耐える事が出来まじょうか。

女の問いに男は苦もなく答えた。

これしきの事、いかほどのものでもない。

男の背中が剥けて血が噴出し、肉が剥き出しになっていた。

女は鞭を打ち据えるのを止めると、傷に良く効く薬を男に与えた。

やはり貴方は私の見込んだ男。今後も決して意に背く事ありませんまいな。

一度口に出した誓い、違える事なぞあるうものか。

女は優しく男を介抱すると、その傷が早く癒えるようにと手厚く面倒を見るのだった。

やがて男の傷が癒えた頃、女は再び男を離れへと連れ出した。そして再び、鞭にて打ち据えるのだった。いかがでございますか。誓いを交わすは容易なれど、この痛みは身に沁みましよう。

これしきの事で音をあげると思つてか。痛くも痒くもない。

男の言葉に歓喜した女は、再び熱心に男の傷を手当するのだった。

女の責苦に耐え抜いた男は、ほどなくして強靱な身体を手に入れた。時期が到来したと見た女は、男に様々な仕事を命令した。

男は女に教え込まれたとおりに仕事をこなし、その度に見事な手際を披露した。

女に命令されるまま、男は強盗でも人殺しでも、その望むままにどんな事でも行つた。

盗んだ盗品は、都の外れにある荒れた蔵の地下へと隠された。

いつしか男は、女の正体が都を騒がしている盗賊団の頭である事に気が付いた。

女はある日、突如として男の前から姿を消した。

時を同じくして、都を騒がせていた盗賊団の噂も聞こえなくなった。蔵の地下に隠されていた盗品は、全て何処かへと運び出されていた。男がその後どうしたのか、その消息を知る者は誰もいなかった。

結びの段

上記の二話、一人の女に惚れた男についての顛末なれば、何れともなし。

青いリンゴ

むかしむかし、自動車はまだ発明されてなくて、乗り物といって馬車しかなかった頃の出来事。その頃の道路は土で出来ていたので、晴れた日でも埃っぽくて、雨が降った日にはすぐ泥んこになるし、あちこちに車輪の跡が残っていたりして、非常に不便でしたが、今よりも少しだけ時間がのんびりと過ぎていたのでした。

ある晴れた日の昼下がり、村と村とを結ぶ道を一台の荷馬車が走っていました。その年はいつもよりも天気に恵まれていたので、たくさんリンゴがとれました。そのため、荷台には山のように積まれたリンゴが満載でした。これから市場に売りに出かけるところなのです。

茶色の馬にひかれていく荷馬車の運転席には、麦わら帽子を頭に載せたおじさんが一人で座っていました。おじさんは別に急いでいる訳でもなかったので、馬の好きなように走らせていました。その日はポカポカといい陽気でしたし、馬の蹄がパカパカなる音を聞いていると、ついつい眠くなり、いつの間にかウトウトしておりました。

おじさんの隣には、彼の飼っていたネコが座っており、始めのうちは鼻の前を飛んでいる蝶を追い回すのに夢中だったので、こちらもいつの間にか丸くなって眠っていました。

そうしてしばらく進んでいると、昨日降った雨の影響でしようか、道の真ん中に大きなデコボコが出来ている場所がありました。そんな事に気がつかないで眠ったままのおじさんとネコと、荷台一杯のリンゴを載せた荷馬車は、車輪を取られてグラリと一揺れしたので、幸運な事に、荷馬車は引っくり返る事もなかったのですが、さすがのおじさんもハッと目を覚まして、今度はしっかりと手綱を握りなおしたのです。でもその時、荷台から一つのリンゴが転がり落ちていたのですが、おじさんはそれにはまったく気が付きません

でした。

荷台から転がり落ちたリンゴは、そのまましばらく転がって行き、道から少し離れた場所まで来てようやく止まりました。

そこへ、一匹のキツネやって来て、リンゴを食べてしまいました。おしまい。

……ここで終わってしまうと困りますね。しょうがないので話はまだまだ続きます。

それから長い年月が経ちました。土で出来ていた道路はやがてアスファルトに変わり、馬車は自動車に変身し、空には鳥と同じように飛行機が飛ぶようになりました。周りの景色もどんどん変わってしまい、いつの間にか、リンゴが転がり落ちたあの場所には、一本の立派な木が生えていました。それはすごく大きく育ち、毎年のようにたくさんリンゴを実らせるのでした。その木に実るリンゴは青い色をしていましたが、とても美味しかったです。

そんな訳で、周りに住んでいる町の人たちは、そのリンゴの木をとても大切にしていました。毎日、かさず水をやりましたし、誰かが勝手にリンゴを盗ってしまわないように、みんなが変わりばんこに見張ったりもしました。

ある日、近くで大きな道路を造る計画が持ち上がりました。リンゴの木が生えている場所はちょうど、交差点になる予定でした。このままだと、工事の邪魔になってしまいます。

最初は、リンゴの木を何処か別の場所に移そうというアイデアもありました。しかし、非常に大きな木だったので、それを移せるだけの広い場所がありませんでした。それに何より、リンゴの木を移すには大変なお金がかかりましたし、移した後枯れてしまう可能性もあったのです。そのまま何もしなければ、リンゴの木は切られ

てしまっていたでしょう。でも、町の人たちは、本当にそのリンゴの木が好きだったので、“どうかリンゴの木は切らないで欲しい”と、偉い人をお願いしたのでした。

そこで、リンゴの木が生えていた場所はロータリーにして、その周りに道路を作る事にしました。これならリンゴの木を切らなくても良かったのです。町の人たちも大喜びです。

やがて、新しい道路が出来ました。もちろんその年もたくさんリンゴが、木に実ったのですが、道路の真ん中に生えているのでみんなが自由にとりに行けません。なにより、子供たちがリンゴをとろうとして、自動車にぶつかりそうになった事も一度や二度ではありませんでした。町の人たちは、本当にそのリンゴの木が好きだったので、“どうかリンゴの木に安心して近づける方法を考えて欲しい”と、偉い人をお願いしたのでした。

そこで、道路の上空に大きな回廊を作る事にして、みんなにはそこを歩いてもらう事にしました。これなら自動車にぶつかる心配はありません。折角なので、リンゴの木の周りにベンチも置いてみる事にしました。町の人たちも大喜びです。

とある町の、とある交差点。信号機のないロータリーの真ん中に、今でもその大きなリンゴの木はあるはずです。青い葉っぱを茂らせ、青いリンゴがたくさん実っているのが見えるでしょう。そこに行けば誰でもきつと、美味しいリンゴが味わえるでしょうし、もしかしたら、リンゴを齧っているあなたと出会えるかもしれませんね、いつの日にか。

カエル池の出来事

いつも決まった時間に決まった場所で店を開くケータリングカーがあり、その店では美味しいエスプレッソを飲むことが出来るというので評判だった。備え付けられたラジオから流れる音楽と辺りに漂うコーヒーの香りに誘われるかのように、一人の客が店を訪れていた。

客は若い青年だった。真っ黒なコートに身を包み、店主に渡された紙コップを大事そうに受け取ると、一口飲んで愛想良く話しかけてきた。

「さすが評判のお店だね。おじさんはこの辺りで店を始めてから長いのかい？」

「そうだね。もう十年くらい前からになるかな。その間にこの辺も随分変わったけれどね。」

懐かしそうに店主が語る。

「昔はここから少し行ったところに池があつてね。この季節になるとよく近所の子供たちがスケートをして遊んでいたものさ。」

「へえ、そうなんだ。こんな街中に池があつたなんて、信じられないね。」

「みんなそう言うよ。だけど、スケート遊びをしていた少年達が池に落ちる事故が起きてね。氷の一部が融けて割れやすくなっていたんだろうけど、それが原因で池は埋め立てられてしまったよ。」

そう言う店主は、青年にその当時の話を聞かせるのだった。

カエル池には、今年も例年と同じように厚い氷が張っていた。

「ロイ。君は知っているかい？この池に住む女の幽霊の話。」

そう言って口を開いたのはジョーと呼ばれている少年だった。

「そんな話聞いた事がないよ。またいつもの出任せだろ？なあ、み

んな。」

「なんだ、ロイ。君は知らないのか？そうか……。まあ、そんな話は知らない方が良さ。」

そう言つて、強引にこの話題を終わらせようとしたのはチヨロと呼ばれている少年だった。その口ぶりからすると、チヨロはこの池に住む女の幽霊について何か知っているようだった。

「そうだね。あれは相当怖い話だから、弱虫なロイは知らなくて良かったと思うよ。その話を聞いたらきつと、夜一人でトイレに行けなくなるからね。」

ハカセと呼ばれている少年がそう付け加える。

そうしたやり取りは短時間の内に行われたのだが、それと気付いた他の少年達は、誰もがみんなその話を知っているような素振りをはじめた。中には秘密を知らないでいるロイの事を憐れむように眺める少年や、自分が秘密を共有している立場にある事を誇らしげに示す少年もいた。

「そうだね。あれは恐ろしい話さ。まったく君は知らなくて幸せだよ、ロイ。」

「僕なんか、夜一人でいる時に限って思い出してしまふんだ。あんな話なんて聞くんじゃないかな。あんな後悔する事もあるくらいさ。」

少年達の間になんか空気が浸透し始めた頃、ジョーが突然こんな事を言い始めた。

「ロイ、悪かったな。さっきの話は聞かなかった事にしておいてくれ。」

「何だよ、それ。自分から切り出しておいて、急にやめるなんて卑怯じゃないか。みんなだって本当はそんな話、知らないんだろ？」

ロイはジョーに向かってというよりも、周りにいる少年達に問い質すようにそう言った。誰か自分の味方をしてくれないか辺りを見渡すのだが、誰もがこの成り行きを面白そうに眺めているだけだった。

「これは秘密の話なんだ。誰にでも簡単に話せる内容じゃない。余

計な事を口にしたばつかりに幽霊の機嫌を損ねでもして、ジョーに災いが降りかかったらどうするんだい？」

「チヨロが知った風な口を聞いてジョーの肩を持つ。」

「僕も偶然に知った話だから、君が知らなくても恥ずかしい事じゃない。まあ、そんなに気を落とすなつて。」

ロイの肩を叩きながら、ハカセが慰めとも同情ともつかない言葉を口にする。ロイはその手を振り払うと、ジョーに詰め寄った。

「ジョー、僕たち仲間だろ。お願いだから教えてくれよ。代わりに何でも言う事を聞くからさ。」

ジョーは、さも深刻な問題を抱えている人のように腕組みをして考え始めた。

「僕たちは固い絆で結ばれた仲間だ。これは秘密の話なんだけれど、君が絶対他の誰にも言わないつて約束してくれるんだつたら特別に話してあげても構わない。どうする？」

ジョーの言葉は随分と恩着せがましい響きを持っていたのだが、それに気付かないくらいロイはその秘密を知りたがっていた。しかし、チヨロが再び口を挟む。

「ジョー！それはあまりにも危険すぎるよ。そんな事をして君に災いが降りかかったらどうするんだ。それに、ロイがこの秘密を誰かに漏らさないとも限らないだろつ？」

「ロイは僕らの仲間だ。約束を破るような真似はしないさ。そうだと、ロイ。」

「ああ。絶対に誰にも言わないよ。」

真剣な表情でロイはジョーに向かって頷くのだつた。

「そんな事を言つて、口では何とでも約束出来るからな……。これは絶対の秘密なんだぞ！」

チヨロがまた余計な口出しをしたせいで、ジョーの決心が一瞬揺らいだように見えた。

「そうだとロイ。いつか君が見せてくれた万年筆があるだろつ？君は秘密を教えてもらつた代わりに、あの万年筆をジョーにあげるんだ。」

「ジョー、君はあの万年筆を随分と欲しがっていたよね。君は万年筆を手に入れられる。代わりにロイに幽霊の話をする。もちろん、どんな災いが君に降りかかってもロイを恨んでは駄目だよ。どうだい？」

さつきから黙って何かを考えていたハカセが、突然そんな提案を申し出た。

「それは素晴らしいアイデアだ！それならジョーも文句無いだろう？ロイも秘密を知ることが出来る。全て上手くいくぞ！まったくハカセ、君は頭がいいな。」

「チヨロが大声で賛同を示すと、誰もがまったく素晴らしいアイデアだと口々にハカセを褒め称え始めた。ジョーの方でもハカセの提案に異存はなさそうだ。」

それを聞いて困ったのはロイだった。問題の万年筆はパパが大切にしていて外国製の物で、一度だけこっそり持ち出してみんなに披露した事があったのだ。みんなには、この万年筆は親戚のおじさんから自分が貰ったものであるとっておいたのだが、よりもよつて今回、それを差し出す破目になるとは予想もしていなかったのだ。「ジョー、それだけは勘弁してくれよ。あれはおじさんから貰った大切な物なんだ。他の事なら何でもするよ。そうだ、珍しい外国の硬貨を君にあげよう。以前から欲しがっていたじゃないか。」

「ジョーは自分の身に災いが降りかかる危険を犯しても君に秘密を打ち明けようとしているんだよ。それなのに、君ときたら僕らの友情よりも万年筆の方が大事だと言っただね。」

「ロイ、君にはがっかりしたよ。僕たちは仲間だと思っていたのに……。」

チヨロとハカセが非常にガツカリした表情でそんな事を言い始めるので、周りの少年達も口々に同様の非難をロイに浴びせ始めるのだった。

「みんな、そう責めるなよ。あの万年筆はロイにとってすごく大切な物だろうから、それを簡単に手放す事なんて出来る訳がないだろ。」

う？ロイ、これはお互いにとって重要な取引だ。ゆっくり考えてみて、もしも気が向いたら声を掛けてくれ。僕はいつでも待っているから。」

そう言うと、ジヨ―はロイを残してその場を立ち去ってしまった。その後を追うように、他の少年達もどこかに行ってしまった。

一人取り残されたロイは、しばらくの間その場から動くことが出来なかった。本当の事を言うと、池に住む女の幽霊の話なんて最早どうでも良くなっていた。それよりもみんなから除け者にされた事が悔しくて仕方が無かった。

どのくらいそうしていたのだろう。ある一つの決意を固めたロイは、ジヨ―の元へと近づいていった。

「どうした、ロイ。」

「ジヨ―。これから僕は家に帰って万年筆を持ってくるよ。だからしばらくここで待っていてくれ。」

「・・・そうか。よし分かった。君が約束を果たすなら、僕はどんな災いでも甘んじて受ける覚悟だよ。これで僕らは本当の親友さ！」

そう言うと、ジヨ―はロイに右手を差し出した。ロイは和解の印としてその手を握った。

「やったぞ、みんな！ロイは僕らの友情の為に大いなる決断を下したんだ。彼に拍手を贈ろうじゃないか。」

そう言ったのは、ハカセだった。

「これで君は完全に僕らの仲間だ。君は立派な男だよ。」

拍手をしながらチヨロもそう言うてくれた。

みんなの声援に後押しされるようにして、ロイは自分の家へと戻るのだった。もちろん、パパには内緒で万年筆を持ち出すために・・・。

ロイは、「ただいま」も言わずに玄関の扉を開けると、家の中へと忍び込んだ。彼の頭の中はこれから行うべき計画の事で一杯だっ

た。この時間、パパは会社に出掛けていて家にはいない。キッチンを見てみると、ママは夕食の仕度に取り掛かっていて、ロイが帰ってきた事にまったく気がついていない様子だった。

問題の万年筆は、二階の書斎に置いてある大きな書き物机の、一番上の引出しに保管されていた。書斎へは勝手に入る事を普段から禁止されていたのだが、パパの留守を見計らって何度か忍び込んだ事があるので間違いなかった。

書斎に向かうには、二階へと続く階段を通らなければならない。普段歩き慣れている階段が、今日は聳え立つ山のように見えた。ママに気付かれないように、一段一段を慎重に、僅かな物音さえ立てないように注意しながら登っていく。

途方もない時間がかかったような気がしたが、どうにかママに見つからずに辿り着く事が出来た。しかし、油断は出来ない。全ての作業を素早く、そして正確に行っていく必要があった。

一階で何か変わった物音がしないかどうか注意を払いながら、万年筆がしまつてある書き物机に近づき、引出しに手を伸ばす。僅かな音さえも立てぬように、少しずつ、少しずつ。

開け放たれた引出しの中で、万年筆は窓から差し込む光を受けて鈍く光っていた。まるで貴重な宝石でも扱うように取り出された万年筆は、手の中でずっしりと重く感じられた。持っていたハンカチで嚴重に包み込むと、素早くポケットの中にしまいこむ。間違いなくそこに納められている事を何度も触って確かめてみる事もした。

引出しを元通り閉じて、僅かな痕跡すら残っていない事を確認し終わると、ロイは書斎を後にしたのだった。世界一の泥棒でもこれほど見事な仕事は出来ないだろうと思えるくらいの出来栄だった。後は誰にも見つからずに家から出るだけで良い。

忍び込んだ時と同じように、慎重に階段を下りていく。無事玄関まで辿り着いて家を後にしようとした、その時。

「あら、ロイ。帰っていたの？それならそうと声を掛けてくれればいいのに。黙って家に入るなんて、まるで泥棒みたいよ。」

ママの声がロイの背後から聞こえてきた。

「僕、ちゃんと“ただいま”って言ったよ。ママが気付かなかったんじゃない？」

ロイは後ろを振り向くと、自分でも驚く程見事な答えを咄嗟に口にしていた。

「そうね。夕食の仕度をしていたから気付かなかったんだわ。また出掛けるの？」

「うん。ちょっと忘れ物を取りに帰ってきたんだ。みんな待っているから出掛けるよ。」

「外は寒いから、これを持っていきなさい。温かい飲み物が入れているから。日が暮れる頃までには帰ってくるのよ。今日はロイの好きなシチューだから。」

そう言つてロイに水筒を渡すと、ママは何事もなかったかのようにキツチンへと戻つて行つた。

ママの姿が見えなくなると、ロイは滅茶苦茶に走つてカエル池へと向かつた。今までに感じた事がないくらいに息が切れて、心臓がドキドキしていた。それにも構わず走り続けた。少年達がこちらに向かつて手を振っているのが見える場所に来るまでずっと。

少年達は興味津々といった様子で向こうから走ってくるロイの方を見ていた。ロイは家から持ち出した万年筆をポケットから取り出すと、慎重な手つきでハンカチの包みを解いていった。

「じれつたいな。僕に貸してくれよ。」

チヨロが横から万年筆を奪い取ろうとするのを、ロイは見事にかわし得意げにこう言つた。

「ほら、約束どおり万年筆を持ってきた。さあジョー、僕に秘密を話してくれ！」

「分かつたよ。君が約束を果たす男だつて事は証明された。今度は僕が約束を果たす番だ。ここにいるみんなが証人だ！いいね。」

ジョーは約束どおり万年筆と引き換えに池に住む女の幽霊の話を聞かせてくれた。ロイにとってはそんな話はこの際どうでも良かった。

た。こうして再びみんなの仲間に加われた事が何よりも嬉しかった。

そんなロイの昂揚した気分は長くは続かなかった。パパの万年筆を勝手に持ち出し、それを友達にあげてしまったのだ。パパが知ったらすごく怒るだろう。時間が経つにつれて自分が犯した事に対する後ろめたさがどんどん募っていき、三人で夕食を食べる頃には、どうしようもなく憂鬱な気分だった。

「どうした、ロイ。今日はやけに元気がないな。何かあったのか？」
「そうよ、ロイ。今日はあなたの好きなシチューなのに、ちつとも食べていないじゃない。どこか具合でも悪いの？」

ロイの様子がおかしいことに気がついたパパとママが声を掛けてくれた。

「うっん。何でもないんだ。きつと、カエル池で遊びすぎて疲れたんだと思うよ。」
ロイはパパの顔を見ないようにしてそう答えた。ママに嘘を吐いた時のように、驚く程自然な答えを自分でも口にしていた。

「カエル池か。懐かしいな。パパも子供の頃は、あそこでよくスケート遊びをしたものだよ。日が暮れても家に帰らずに滑っていたから、よく怒られたな。」

「・・・そうなんだ。」

「そんな時には決まってこう言われたものさ！“そんなに遅くまでカエル池で遊んでいたら、池の幽霊に連れて行かれるよ”ってね。」

ロイは一瞬、自分の耳を疑ってしまった。今日、あれほどの危険を冒してまで手に入れた秘密を、パパも知っていると言うのだから。「パパ！パパもカエル池の幽霊の話を知っているの？」

「嫌だわ、夕食の席で幽霊の話をするなんて。私聞きたくないわ。」
ママは明らかに嫌そうな顔をしていたが、ロイが熱心にその話を聞きたがったので、それに応えるように、パパは話し始めてくれた。
「その昔、この街にとてめ綺麗な女の人がいるね。どれくらい綺麗

かつていうと、そうだな・・・」

パパはママの方を見て、ウィンクをしながらこう付け加えた。

「ちょうどママみたいな感じかな。」

「まあ！パパったら。それで、どんな話なの？」

先程まで嫌そうな顔をしていたママだったが、パパの一言に急に態度が変わったようだった。

「その女の人は心も綺麗でね。大勢の男たちが彼女に結婚を申し込んだんだ。結局、彼女の心を射止めたのは、隣町からやって来たあの男でね、二人は一年後に結婚をする事を誓い合ったのさ。ところが、その男には彼女の他に結婚を約束した相手があった。それはこの辺りで一番の金持ちの娘でね。財産に目がくらんだ男は金持ちの娘と結婚してしまい、二度と再び彼女の前には現れなかった。男の不義を知ったその女の人はひどく悲しんで、冬のカエル池に身投げしたのさ。彼女の遺体を捜そうと街の人が集まった時には池は厚い氷で覆われていてね、結局彼女の遺体は見つからないままだったそうさ。それ以来、氷の下からこちらを窺う女の顔を見たとか、池から女の手が伸びて氷の下に引き摺り込まれそうになったとか、そういう噂が囁かれるようになったって訳さ。これがカエル池の幽霊の話さ。どうしたロイ、顔色が悪いぞ！さては・・・」

「別に怖くなんてないよ。平気なもの。」

パパはロイの顔色が変わったのを見て、ロイが怖がっていると思っただろうだったが、それはまったく違っていた。その話はジョーが教えてくれた話とまったく同じだったからだ。

「ハッハッハ。心配するな、ロイ。今の話はパパが子供の頃からある作り話さ。あのカエル池で死んだ人なんて誰もいないから安心しなさい。」

「何だ、ただの作り話なの。驚かせないでよ。」

ママは内心怖かったみたいで、ほっと一安心した様子だった。

「さあ、今日はもう遅い。ロイ、早く寝なさい。」

ロイの耳にはもう、パパの言葉は聞こえていなかった。

翌朝、ロイがカエル池に出掛けると、既に何人かの少年達が集まっていた。その中にジョーの姿もあった。ロイはジョーに近づくと、何も言わずに掴みかかった。

「いきなり何するんだよ、ロイ。」

「分かっているんだろ！昨日話してくれた幽霊の話。あんなの秘密でも何でもないじゃないか。あれはまったくの出鱈目さ。災いが降りかかるなんて上手い事言っ、僕を騙したな。万年筆は返してもらうぞ！」

ロイの剣幕に一瞬呆気にとられた様子の少年達であったが、やがて馬鹿にしたようにみんなが笑い出すのだった。

「何がおかしいんだ。」

そう問いかけるロイに対し、チヨロが口を開く。

「もう少し楽しめると思っていたのに、こんなに早くばれるなんてつまらないな。」

「まったくだ。あんまりお前が必死だから、笑うのを我慢するのに一苦労だったよ。」

そう言ったのはハカセだった。

「ジョー、僕たち仲間だろ。お願いだから教えてくれよ。代わりに何でも言う事を聞くからさ」だぜ。何度思い返してみても笑える台詞だったよ。」

「それもこれも、僕の迫真の演技があつてこそさ！そうだろ、みんな。」

ジョーはそう言うと、ポケットから万年筆を取り出してロイに投げ返した。

「ほらよ、誰がこんな物欲しがるか。これがお前の親父の物だつて事は、ここにいる誰もが知っていたのさ。僕たちはお前が万年筆を持って来る度胸があるのかどうか、それを賭けていたのさ。ロイ、お前のおかげで随分儲けさせてもらったぜ。感謝するよ！」

「ジョーの一人勝ちだなんて、まったくついてないぜ。」

「本当だよ。まあ、随分と楽しませてもらったから、悪くないさ。」
「おいおい、みんな。まあそう言うなって。これから僕のおごりで何か御馳走してやるよ。何て言ったって“僕たちは仲間”なんだからな。」

ロイを残して少年達は笑いながら立ち去っていった。その背中に向かってロイはこう呟くのだが、その言葉は少年達の耳には届かなかったようだった。

「お前達、後でどんな災いが降りかかっても知らないからな！せいぜい、氷の下に引き摺り込まれないように気をつけるんだな。」

街角には、いつも決まった時間に決まった場所で店を開くケータリングカーがあった。店の前には真っ黒なコートに身を包み、片手にカップを持った若い青年が立っていた。

「ご馳走さま。こういう寒い日には温かい飲み物が一番だね。凍りついた体を融かしてくれるような、そんな気がするよ。ところで、ここから駅に向かうにはどう行けばいいかな。」

「そうだな。ここからだ道が複雑だね、地図でも書いたほうが分かりやすいんだが……。」

「それだったらこれを使ってよ。」

そう言っただけで青年はポケットからメモ帳と万年筆を取り出した。

「なかなか良い万年筆だね。外国製かい？」

「ああ。僕の父親から譲り受けた大切な品さ。これには色んな思い出が詰まっているんだ。」

そう答える青年の手の中で、太陽の光を浴びた万年筆は鈍く光り輝いていた。

眠れぬ夜に人知れず羽ばたくように・・・

『青い鴉』のあとがきに代えて 稲葉 ほつき

“夜の闇をよぎる怪鳥のように・・・”。私の友人であり、良き理解者でもある柴由良がいみじくも指摘したとおり、私の作品は定まった形を取らぬままに、読む者の心に不快な影を落としていくものらしい。その印象は、時と状況に応じて伸びたり縮んだりしてくるようではあるが、その結果として私が彼らから賜った評価というのは「まったく意味が分からない」というものばかりだった。「とてつもなく奇異な印象を受けた」と評してくれる友人も中にはいた。

それとは別に、私の作品は統一感がないとよく言われる。それはある意味で私の飽きっぽい性格に起因するものであり、我ながら何とも節操がないとしか言いようがない。しかしその一方で、こうして今までに書き溜めてきた作品を集めてみると、何とも言えぬ奇妙な味わいと共に、他人には計り知れない程の親近感を覚えるのも事実である。それはまったくの偶然の産物でしかなく、それを感じているのは多分私くらいのものだろうから、これ以上ない程の手前味噌であり、何とも都合の良い話である。

これでも一応、作品を書き始めにあたっては、私なりの構想と明確なる意思を持って机に向い、まだ見ぬ読者が楽しむ姿を思い浮かべながら書いているつもりなのだ。ところが、完成した作品を改めて見直してみると、一体誰がこんな展開を思いついたのだろうと思ふような作品がしばしばあり、その多くは忸怩たる結末を迎えている。それはまるで、普段は主人である私の意志に大人しく従っていたはずの影が、一度月の光を浴びた途端に昏間とは異なる形をとり始めたばかりか、自らの意思によって行動しているように見える事と何か深い関係があるのかもしれない。例えそこに、私の支配の及

ばない見えない力が働いていたとしても、結局のところ全ての責任は私にあり、私の中から生み出されたものである事に違いはない。

最後に標題でもある『青い鴉』について少し触れて締めくくりたいと思う。

鴉が黒い事は百も承知であるが、青い鴉がいたとするならば、透き通るような青空に溶け込んで、それは素敵に見える事だろう。ひよつとしたら、鴉に対する人々の考え方も一変するかもしれないし、幸せをこの手に運んでくれるかもしれない。

しかしながら、寵愛の対象として皆に好まれる存在よりも、夜の闇に潜む怪鳥へと姿を変えてくれる方が一層私の好みではある。真の暗闇の中では、黒よりも濃い青の方がよく溶け込むものなのだ。いつその事、近所でも評判の善良なる紳士が、冷酷非道な殺人鬼へと姿を変える様な闇夜に、青い鴉がその羽を広げて人々の心に黒い影を落としていく光景を見てみたいとすら思う。そんな時にはきっと、夢遊病者の様な姿で夜の街を彷徨いながら青い鴉を探し追い求めている私の姿を目撃する事になるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6444g/>

青い鴉 - 二十と一の短編 -

2010年10月10日05時26分発行